

# 史跡 齋宮跡

令和2年度発掘調査概報

2022年2月

齋宮歴史博物館









第199次調査 調査区俯瞰画像【飛鳥時代】



飛鳥時代の斜方位区画の北西部（東から）





斜方位区画の掘立柱塼・西第1堂・正殿（北西から）





## 序

昨年、史跡齋宮跡の発掘調査がはじまって50周年を迎えました。今後も齋宮歴史博物館では、その歩みを止めることなく、史跡の実態解明を目指して、よりいっそう強く進めてまいります。また、全国で唯一無二の遺跡となる齋宮を体感できるサイトミュージアムとして、国内を問わず海外へも視野を向けて魅力ある発信を続けてまいります。

さて、今回報告する第199次発掘調査は、齋宮の成立にかかる実態を解明するために、史跡西部の中垣内地区で行ったものです。従来から史跡の実態解明において課題とされていた飛鳥時代の遺構について、二つの大きな成果をあげる事が出来ました。それは飛鳥時代後期の掘立柱塀で囲まれた方形区画の北西角を確認したことと、区画の内部で正殿と西脇殿を確認したことです。これらは飛鳥時代の齋宮を考えるため、また今後、周囲の発掘調査方針を考えるための重要な成果と言えます。

この調査で得られた成果は、地元明和町をはじめ、ひろく県民の皆様や齋宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

史跡齋宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、齋宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡齋宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2022（令和4）年2月

齋宮歴史博物館

館長 大西 宏 明

## 例 言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が令和2年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第199次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町が調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う『史跡斎宮跡 令和2年度現状変更緊急発掘調査報告書』（第198次調査）は、別途明和町が刊行する予定である。
- 3 調査区名の表示方法（例：6AL13）については、斎宮歴史博物館 2003『史跡斎宮跡 平成13年度発掘調査概報』による。
- 4 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第VI座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。
- 5 斎宮跡の遺構・遺物の時期区分については、斎宮歴史博物館 2019『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』に拠るが、飛鳥時代の土器編年については、西氏の都城編年を基準としつつ奈良文化財研究所・歴史土器研究会の資料集を参考とした。弥生土器編年については、石黒・宮腰両氏の論文を用いた。  
西 弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社  
奈良文化財研究所・歴史土器研究会 2019『飛鳥時代の土器編年再考』  
石黒立人・宮腰健司 2007『伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題』『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会
- 6 斎宮跡の時期区分については、土器編年（土器の段階設定）に基づき「期・段階」を用いて「斎宮跡Ⅰ期第Ⅰ段階」等と表記するが、本文中ではこれを簡略的に「斎宮Ⅰ-Ⅰ期」と表現している。また、時代の表記は3段階区分で「前・中・後期」、世紀の表記は「前葉・中葉・後葉」とした。例えば、飛鳥時代後期、7世紀後葉などとする。
- 7 遺構記号は、文化庁文化財部記念物課 2010『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編Ⅰ』に準拠し、遺構の種類から以下のように表記している。  
SA：塀 SB：掘立柱建物 SD：溝 SK：土坑 SX：その他・不明遺構  
SZ：周溝墓 SP：柱穴・ピット（SA・SBIに伴う柱穴はP+番号と表記している）
- 8 遺物実測図は基本的に実物の4分の1で行っている。
- 9 土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本イソキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第5版（1989年）を用いて補っている。
- 10 発掘調査にあたっては、斎宮跡調査研究指導委員のほか、以下の方々からご教示、ご協力を賜った。  
相原嘉之、網 伸也、塩川哲朗、鈴木一謙、竹本 晃、仁藤敦史、林部 均、松尾充晶、山中敏史  
（五十音順 敬称略）
- 11 図面・写真等の調査資料および出土遺物は、斎宮歴史博物館で一括保管している。
- 12 発掘調査及び本書の執筆・編集は川部浩司が担当し、現地調査と資料整理については、大川勝宏・山中由紀子・宮原佑治・小原雄也・八木光代・森本周子・中西宏美の補助を得た。

# 目 次

I 前言	1
II 第199次調査	7
III 重要考古資料（補遺編）	33

## 挿 図 目 次

第I-1図	史跡齋宮跡位置図	4
第I-2図	令和2年度発掘調査位置図	5
第I-3図	史跡齋宮跡における大地区表示図	6
第II-1図	第199次調査 グリッド図	7
第II-2図	第199次調査区位置図	8
第II-3図	第199次調査 遺構平面図	9
第II-4図	第199次調査 土層断面図	10
第II-5図	SK11347～11350、SZ11351～11358 平面図・断面図	12
第II-6図	SA6280・11120平面・断面図	14
第II-7図	SB11360平面・断面図	15
第II-8図	SB11361平面・断面図	16
第II-9図	第199次調査 出土遺物実測図1	18
第II-10図	第199次調査 出土遺物実測図2	19
第II-11図	第199次調査 出土遺物実測図3	20
第II-12図	第199次調査 出土遺物実測図4	21
第II-13図	第199次調査 出土遺物実測図5	22
第II-14図	弥生・古墳時代の遺構配置図	23
第II-15図	飛鳥時代の齋宮中樞城の構造	24
第II-16図	飛鳥時代の斜方位区画と倉院の変遷過程	25
第III-1図	重要考古資料 遺物実測図1	34
第III-2図	重要考古資料 遺物実測図2	35

## 表 目 次

第I-1表	令和2年度史跡齋宮跡の現状変更等許可申請一覧表	3
第I-2表	令和2年度発掘調査一覧表	3
第II-1表	第199次調査 建物等一覧表	17
第II-2表	第199次調査 遺構一覧表	17
第II-3表	第199次調査 遺物観察表1	27
第II-4表	第199次調査 遺物観察表2	28
第II-5表	第199次調査 遺物観察表3	29
第III-1表	重要考古資料 遺物観察表1	37
第III-2表	重要考古資料 遺物観察表2	38

## 写真図版目次

巻頭図版 1	第199次調査 調査区俯瞰画像〔飛鳥時代〕／飛鳥時代の斜方位区画の北西部	
巻頭図版 2	斜方位区画の掘立柱塼・西第1堂・正殿	
写真図版 1	調査区北半部全景／調査区南半部全景	……30
写真図版 2	SA6280／SB11360／SB11360 西妻柱筋／SB11360 身舎南側柱筋／SB11360 南廂	……31
写真図版 3	SA6280 P1 土層／SA6280 P3 土層／SA11120 P3 土層／SB11360 P1 土層／ SB11360 P2 土層／SB11361 P1・SB11362 P1 土層／ SB11362 P3・SB11363 P2 土層／SZ11356 南側周溝 土層・土器出土状況	……32

# I 前 言

## 1 調査の経緯と概要

### 史跡齋宮跡にかかる経緯と経過

齋宮跡の発見の契機は、高度経済成長期に齋宮段丘面の西縁部で大規模な宅地造成計画がなされ、その開発事業に先立って実施された昭和45年からの齋宮跡(古里遺跡)の発掘調査による。大型の建物を含む多くの掘立柱建物、井戸、土坑、奈良時代と鎌倉時代の大溝、踏脚礎や大型赤彩土馬、緑釉陶器などが発見され、齋宮関連の重要遺跡と認識された。昭和48年度から文化庁の補助事業として確認調査を重ね、昭和54年3月27日に国史跡に指定され、東西2km、南北700mに及ぶ137haの史跡範囲が把握されるに至った。それと同時に管理団体指定は明和町となる。

三重県では、史跡指定に伴い齋宮跡調査事務所を設置して発掘調査にあたり、平成元年度からは新たに開館した齋宮歴史博物館によって、史跡の内容確認のための計画的な学術調査を継続的に実施している。

齋宮跡の発掘調査では、史跡東部に所在する方格街区と平安時代の齋宮中樞部の具体的な解明が進展した。平成27年度には柳原区画で平安時代前期の齋宮寮庁(正殿・西殿・東殿)を対象に、活用のための史跡整備の一環として復元建物を建設し、史跡公園「さいくう平安の社」が公開活用されている。

明和町では「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取組み、平成24年6月6日に国の認定を受けた。同計画に基づいて、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした環境整備を計画し、平成24年度に発掘調査を行い、平成27年度から工事に着手、平成29年3月に「いつきのみや地域交流センター」が竣工した。さらに平成27年4月24日には「新皇女斎王のみやこ 齋宮」が日本遺産に認定された。

### 史跡齋宮跡の発掘調査の履歴

昭和45年の齋宮跡(古里遺跡)の確認調査(第1次)を皮切りに、史跡内容確認の計画的な学術調査、現状変更に伴う調査が積み重ねられ、令和2年度は50年目の節目を迎えた。平成27年度まで史跡東部の平安時代齋宮にかかる方格街区内部の発掘調査に重点を置き、具体的な構造の解明に取り組んできた。これらの成果を毎年、発掘調査概報としてまとめて

いるが、斎王の宮殿「内院」、柳原区画の「齋宮寮庁」、下園東区画の「寮庫」については正式な発掘調査報告書を刊行している。今後はこれまで調査を行ってきた方格街区内の他の区画とともに、近年実施している飛鳥時代と奈良時代の齋宮中樞域にかかる発掘調査の正式報告書を順次刊行していく方針である。

### 『発掘調査基本方針』の策定

平成29年3月に齋宮歴史博物館では、史跡齋宮跡発掘調査の考え方や調査計画をまとめた『史跡齋宮跡発掘調査基本方針』を策定した。当該方針での史跡内容確認は、初現期(飛鳥～奈良時代)の齋宮の実態解明、方格街区内部の構造解明、衰退期(平安時代末～鎌倉時代)の齋宮の実態解明、齋宮に関わる居住、生産・流通、墓域等の解明の4項目を課題に挙げた。

まず皮切りに、史跡西部での飛鳥・奈良時代の齋宮中樞域にかかる実態解明を掲げ、5年間の重点調査を目標とした。特に史跡西部の中垣内地区は、古代「伊勢道」が本来の直線道路から北側にわずかに湾曲する部分を含み、さらに伊勢道から北側あるいは南側に派生する道路がみられるなど、伊勢道が敷設される前後の時期には、重要施設が集中すると予想されてきた。

これまでは、平成2年度の第85-8次調査などで、飛鳥時代の掘立柱塼と想定される柱列を中心に、方位が北で東に約33°振れた配置をとる多数の建物跡を確認している。さらに奈良時代になると、方位を正方位へと転換した掘立柱塼による2つの方形区画が存在しており、いずれも複数回の建て替えが確認されている。方形区画のフレームのみの確認に留まるが、奈良時代の齋宮中樞域が推定される重要地区との認識は、今も変わっていない。

### 飛鳥・奈良時代の齋宮の実態解明

『基本方針』策定から3年にわたる計画調査によって、飛鳥・奈良時代の齋宮中樞域の実態解明を進めてきた。重要な調査成果として、飛鳥時代の掘立柱塼で構成される方形区画の北東角部(第193次)、塼東辺には四脚門(第197次)が設けられていることを確認した。さらに区画内部の東側には、6×2間の掘立柱建物2棟を南北に配列し、これらの建物の側柱筋には「目隠扉」を設置していると推定され(第193次・197次)、区画内部の西側でも掘立柱建物が検出され

ていることから（第85-8次）、区画内部には南北方向に3棟並べた建物列を左右に2列分を設けていると復元でき、こうした6棟の掘立柱建物は「脇殿」と推測されるようになった。なお、斜方位区画西側の段丘崖までの空間には、建物軸を揃えた総柱建物群の「倉院」を配置していることも判明した（第195次）。

これまでの調査成果を受けて4年目にあたる第199次調査は、方形区画の規模と構造を明らかにすることを主眼とし、特に掘立柱塼で構成される区画の北西角の確認と区画内部の建物構成（正殿・脇殿など）の把握を目的として実施した。

調査面積は270.4㎡、調査期間は令和2年9月7日～令和3年1月29日で、実働47日間、作業員数約328.5人を要した。

#### 発掘調査現場の公開活用

斎宮歴史博物館では、史跡への来訪者の増加や魅力の向上のために、発掘調査現場の積極的な公開活用を行っている。具体的には、発掘現場の随時公開や見学者への説明、SNS・ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や「子ども1日体験発掘教室」、学校等団体を対象とした体験発掘を開催している。

しかし、令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止により、積極的な現地公開や説明会は控えるとともに、発掘関連イベントは取り止めざるを得なくなった。そのような社会情勢のなか、期待に応える調査成果を得たことから県民や社会還元の一環として、例年の現地説明会の体裁ではなく現地公開だけでも実施できないか模索を続けた結果、最終的に計2回の現場公開を実施できた。

令和2年度秋季に開催した国史跡斎宮跡発掘50周年記念特別展『斎宮と古代国家～飛鳥・奈良時代の斎宮を探る～』の関連行事として、令和2年11月21日に現場公開を行い81人、発掘調査終盤の翌年1月16日にも現地公開を行い152人の見学者があった。いずれも見学者に対してマスク着用、手指消毒、検温などの感染防止対策、3密（密集・密接・密閉）を回避しつつソーシャルディスタンスの徹底により安全性に万全を期して実施した。

#### 発掘調査成果の公開講座

斎宮歴史博物館では、最新の発掘調査成果の報告と調査研究課職員による「さいくう西脇歴史フォーラム」でのシンポジウムを例年3月に開催している。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止

の観点から、開催場所を「いつきのみや地域交流センター」へ移し、令和3年3月13日に開催した。今回は事前申込制や人数制限を行った上で実施し、51人の参加者を得た。

## 2 調査体制

史跡斎宮跡の調査研究に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課が担当した。当該報告に関わる組織は以下の体制で行った。

<第199次調査>

・令和2年度

大川勝宏（副参事兼課長）  
山中由紀子（主幹兼課長代理）  
川部浩司（主査）  
宮原佑治（主任）

・令和3年度

大川勝宏（副参事兼課長）  
山中由紀子（主幹兼課長代理）  
川部浩司（主査）  
小原雄也（主任）

## 3 斎宮跡調査研究指導委員会

斎宮跡の発掘調査・報告書作成等について指導・助言を得るため、例年1回の斎宮跡調査研究指導委員会を開催している。令和2年度の指導委員は以下のとおりである。

〔指導委員〕

浅野 聡（三重大学大学院教授）  
稲葉信子（筑波大学名誉教授）  
小澤 毅（三重大学教授）  
京楽真帆子（滋賀県立大学教授）  
金田章裕（京都大学名誉教授）  
黒田龍二（神戸大学名誉教授）  
仁藤晋子（国士館大学教授）  
増岡 徹（京都橋大学教授）  
松村忠司（奈良文化財研究所所長）  
木橋裕美（愛知県立大学准教授）  
渡辺 寛（皇学館大学名誉教授）  
綿貫友子（神戸大学大学院教授）

（五十音順・敬称略）

令和2年度は令和3年1月10日に指導委員会の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言発令により、開催を中止せざるを得なくなった。これに伴い、個別の現地指導により諮る方針に転換し、コロナ禍にも関わらず小澤・黒

田・増潤・渡辺の各委員に指導を得た。また、全委員及び文化庁・三重県・明和町に指導委員会議資料を送付の上、書面にて意見聴取を行った。

## 4 令和2年度発掘調査一覧

文化財保護法第125条第1項の規定による史跡現状変更等許可申請のうち、令和2年度は65件（国許可21件、県許可44件）があった。このうち、当該許

可申請の許可条件に基づき史跡畜宮跡の発掘調査及び立会いを要した案件については、その内訳を第I-1表、発掘調査を実施した内容は第I-2表にまとめた。

明和町主体の第198次調査については、『史跡畜宮跡 令和2年度現状変更緊急発掘調査報告』として、令和3年度に明和町が刊行する予定である。

現状変更等許可申請の内容	申請及び許可件数	対応別件数
個人・民間企業による申請	33	発掘調査9、立会24
明和町による地域環境整備に伴う申請	19	立会19
明和町等による史跡環境整備及び維持管理に伴う申請	11	発掘調査4、立会7
三重県による計画的発掘調査のための申請	2	発掘調査1、立会1

第I-1表 令和2年度史跡畜宮跡の現状変更等許可申請一覧表

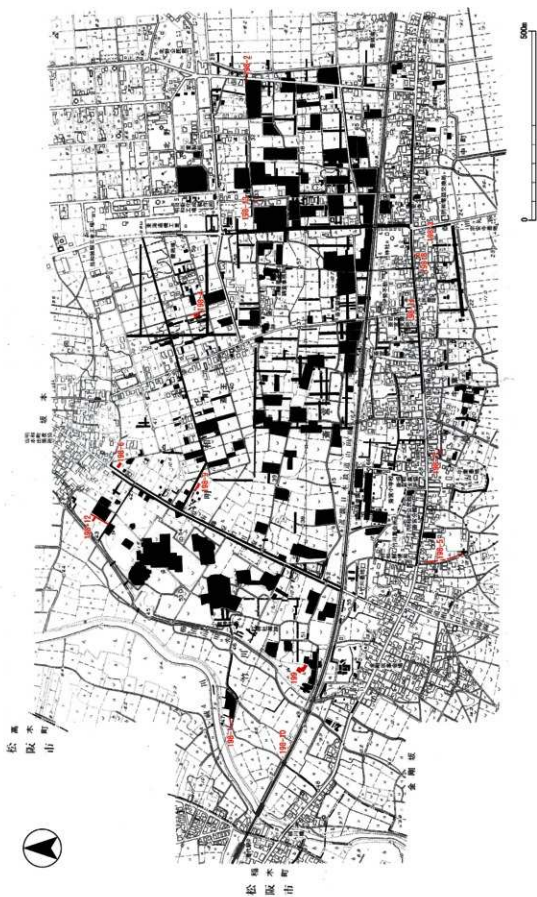
調査次数	地区	調査面積 (㎡)	調査期間	調査場所	現状変更 申請者	現状変更 申請理由	保存管理の 土地利用区分
199	G10	270.4	R2.9.7~R3.1.29	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
198-1	A8	37.5	R2.4.24~5.11	明和町大字竹川地内	明和町	公園整備	第三種保存地区
198-2	V8	35.0	R2.5.22~5.27	明和町大字畜宮字東加座 ・東前沖	明和町	排水路改修	第一・二・三種保存地区
198-3	R13	7.0	R2.5.29~6.2	明和町大字畜宮字牛葉	個人	住宅建築	第三種保存地区
198-4	P7	115.0	R2.8.17~9.16	明和町大字畜宮字楽殿	個人	住宅建築	第三種保存地区
198-5	IB・IIA・ J14	110.5	R2.9.8~10.7	明和町大字畜宮字南裏	明和町	発掘調査	第三種保存地区
198-6	L5	76.5	R2.10.6~10.19	明和町大字畜宮字古里	個人	住宅建築	第三種保存地区
198-7	L13	42.2	R2.10.27~R3.2.12	明和町大字畜宮字牛葉	個人	住宅建築	第三種保存地区
198-8	R13	22.0	R2.11.26~12.3	明和町大字畜宮字牛葉	個人	住宅建築	第三・四種保存地区
198-9	K7	80.0	R3.1.14~2.12	明和町大字畜宮字塚山	明和町	発掘調査	第二種保存地区
198-10	D9・E9	3.8	R3.1.15	明和町大字竹川字祇戸	明和町	散策路整備	第三種保存地区
198-11	P13	1.7	R3.3.1	明和町大字畜宮字牛葉	個人	浄化槽設置	第四種保存地区
198-12	K4・K5	156.0	R3.3.1~3/22	明和町大字竹川字古里	個人	宅地造成	第三種保存地区
198-13	S8	30.5	R2.10.26~R3.3.30	明和町大字畜宮字西加座	明和町	排水路改修	第一・二・三種保存地区

第I-2表 令和2年度発掘調査一覧表

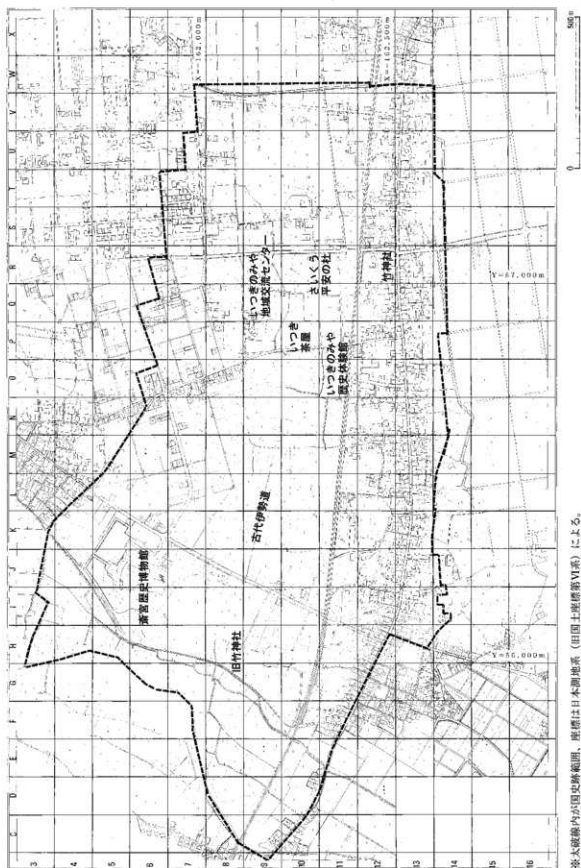


第 I - 1 図 史跡斎宮跡位置図 (1 : 500,000・国土地理院 1/25,000「松阪」 「明野」を改変)





第1-2図 令和2年度発掘調査位置図 (1:10,000)



※本図面内が国史跡範囲、座標は日本測地系（旧国土地院第VI系）による。

第 I - 3 図 史跡齋宮跡における大地区表示図（2002年策定）

## Ⅱ 第199次調査 (6A F10 中垣内地区)

### 1 はじめに

半世紀にわたる発掘調査の蓄積によって、史跡西部の斎宮段丘西縁部には、古代「伊勢道」を基点として南・北派生道路沿いに飛鳥～奈良時代の掘立柱建物や堅穴建物など、広範な遺構形成が確認されている。特に掘立柱塼で構成される方形区画による空間整備が複数箇所で見出されており、平安時代に方格街区が敷設される以前の飛鳥・奈良時代斎宮の中核域が所在すると推定されてきた。

近年の発掘調査によって、飛鳥時代の斎宮中核域は、伊勢道から南へ派生する直線道路の敷設軸や段丘崖にみる地形環境に合わせた北で東に約33度振れる方位で、掘立柱塼による方形区画を基調とすることが判明してきた。方形区画は、第193次調査で掘立柱塼の北東角が確認され、その延伸部分の第189・197次調査で東辺と四脚門、第85-8次調査をその西辺とした方形区画の構成、区画内東側で掘立柱建物3棟が南北に連なる配置が明らかとなっている。方形区画は約33°東偏する方位をとり、東西幅約41m、南北幅55m以上の規模をもち、区画内部は正殿・脇殿相当の掘立柱建物が整然と配置しているものと想定される(本書ではこれを「斜方位区画」と呼称する)。一方、斜方位区画と段丘崖の間の空間には、第195次調査で大別4期細別5期に峻別される総柱建物群の計画的な配置が確認され、斜方位区画には倉庫群、いわば「倉院」が付随する空間構成が明確となった。このように整備された空間を飛鳥時代の「斎宮中核域」と捉えることにした。

奈良時代には、正方位の配置で方形に掘立柱塼をめぐらす空間整備が隣接する2地点で設けられる(これを「正方位区画①」・「正方位区画②」と呼称する)。正方位区画の平面規模は、いずれも南北約57mを測るが、ほぼ同一の地点で2～3回の建替えが確認されている。配置をみると区画が東西に併存、あるいは交互に変遷を重ねていることから、飛鳥時代の斜方位区画と同様の性格が推定される。いまだ実態は不明ながら、これらの空間を奈良時代の斎宮中核域と仮定しておく。

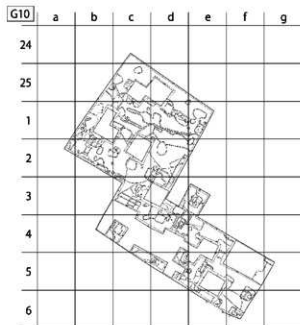
さて、今回の第199次調査地は、斎宮段丘西縁部に位置し、旧若宮八幡神社の旧境内地にあたる。明

治年間には現在の竹神社に合祀され、それから地元の竹川区代表9名の名義で管理されてきた。社殿跡地には「大正十五年一月建立」の銘がある八幡社社碑が建てられ、その後にはスギ・ヒノキが植林されたようで、現在まで大きな土地利用はなく、結果として森林景観を呈することになった。竹川区管理であった旧境内地は、明和町により平成30年度に公有化された。発掘調査地は一部民有地を含むが、多くは公有地にあたる。

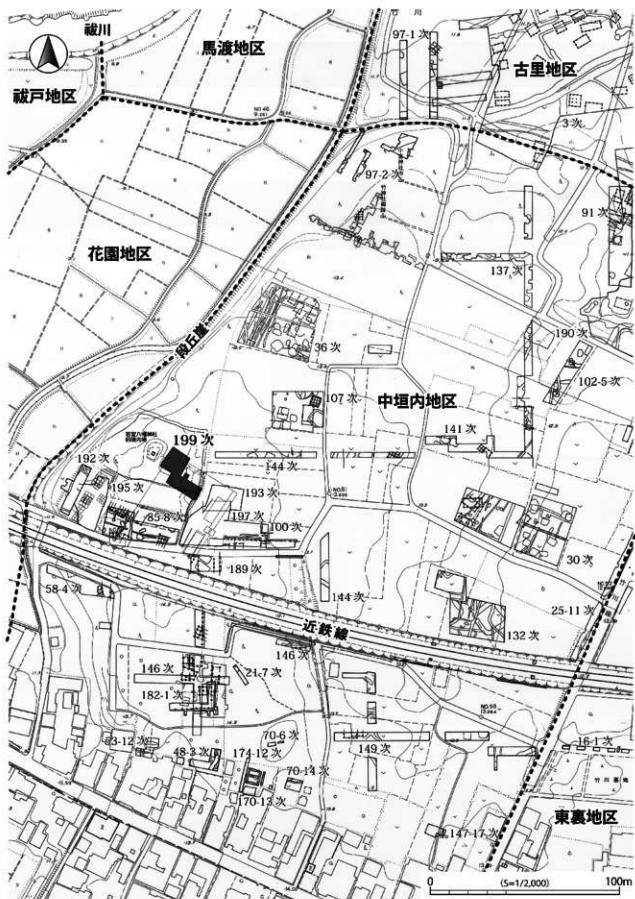
発掘調査は、飛鳥時代の斎宮中核域と推定される斜方位区画の規模と構造を明らかにするために実施した。特に掘立柱塼で構成される斜方位区画の北西角の確認と区画内部の建物構成(正殿、脇殿相当の西の殿舎など)の把握を目的としている。

### 2 地形環境と地層

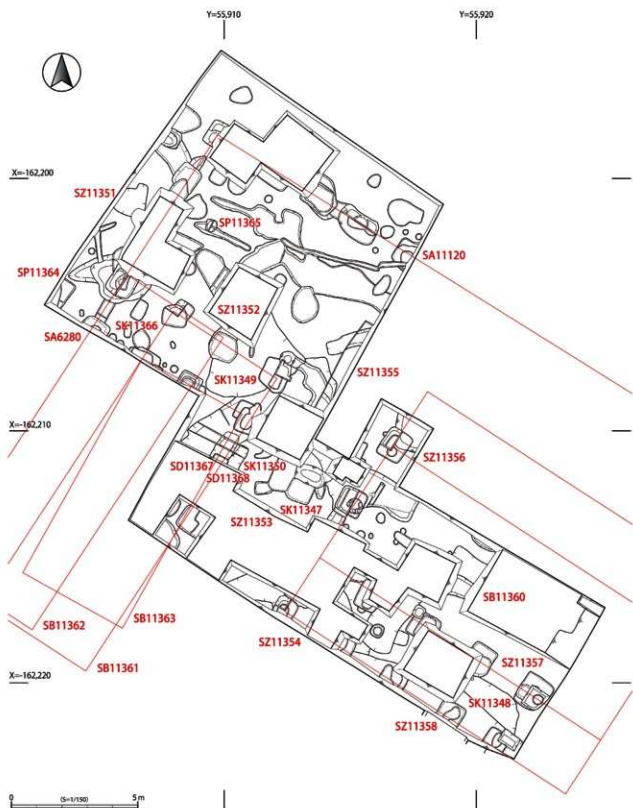
史跡斎宮跡は、紀伊山地に端を発する楠田川(蔵川)・宮川の下流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の玉城丘陵・大仏山丘陵を基点として、そこから北へ段丘高地面(明野段丘面)、段丘中位面(斎宮段丘面)の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地(海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地)を介して、伊勢湾へと連なる。史跡斎宮跡



第Ⅱ-1図 第199次調査 グリッド図



第Ⅱ-2図 第199次調査区位置図 (1 : 2,000)



第Ⅱ-3図 第199次調査 遺構平面図 (1:150)



は、段丘中位面（畜宮段丘面）に立地する。史跡西部の段丘西縁部を最高所（標高14.5m程度）として、全体に東北東に向けて緩やかに下へ傾斜し、史跡の東部では標高9m程度となる。傾斜角度は1°程度の平坦な地盤を形成している。

第199次調査地は、段丘西縁部の森の中で実施した。段丘崖下の沖積低地（現在の水田面）からは3～4mの比高がある。現地表面の標高は13.7～14.5mで、後述する遺構検出面（地山面）の標高は13.5m前後である。

地層の把握は、第193・197次調査での観察所見を参考としつつ、第192・195次調査で得られた地層の認識を踏襲した。基本層序は上から作土（A1層）、客土（A2～A7層）、遺物包含層（B1・B2層）、地山からなる。地山面の標高は、調査区の北西端で13.4m、南東端で13.5mを測る。

現在、八幡社趾碑が建つ社殿跡地をはじめ旧境内地は、近世陶磁を含む客土により造成・整地されており、少なくとも近世に境内地が整備された来歴が地層観察と出土遺物によって把握できた。調査地内での中世遺構は乏しいが、第193・197次調査では区画溝を伴う屋敷地の存在が明らかとなっている。土地利用の単調さから若宮八幡神社の創祀が中世まで遡る可能性がある。

古代以前の遺構の大半は、遺物包含層の上面から掘り込んでいる。遺物包含層と遺構埋土の碎屑物の構成や色調が似ているため、発掘調査にあたっては、包含層上面での遺構検出は困難であり、地山直上で行って誤認を回避するよう努めた。

### 3 遺構

調査の結果、弥生・飛鳥時代の各種遺構を検出した。検出遺構は、弥生時代前期後葉～中期前葉の土坑4基、弥生時代中期中葉～後葉の方形周溝墓8基、飛鳥時代後期の掘立柱塚2条、掘立柱建物4棟などがあった。また、掘立柱建物と考えられる柱穴を検出したものの、建物配置や規模、所属時期などの詳細は判然としないものがある（第Ⅱ-1～8図）。

なお、遺構番号は時代順に番号を付与した。

#### （1）縄文時代の遺構と関連地層の不在

縄文時代後期の土器は少量出土しているが、いずれも基本層序B層から出土したもので、縄文時代に比定される遺構は確認していない。また、周辺の調査区で認められた縄文時代の遺物包含層の形成は、地層において明確に把握できなかった。

#### （2）弥生時代の遺構と関連地層

**遺物包含層** 調査区全域において、弥生時代前期後葉～中期前葉を中心とした土器の破片が出土している。基本層序B層と把握した遺物包含層は当該期のもので、周辺の調査地にも及んでおり、広範囲に形成されていることを追認できる。

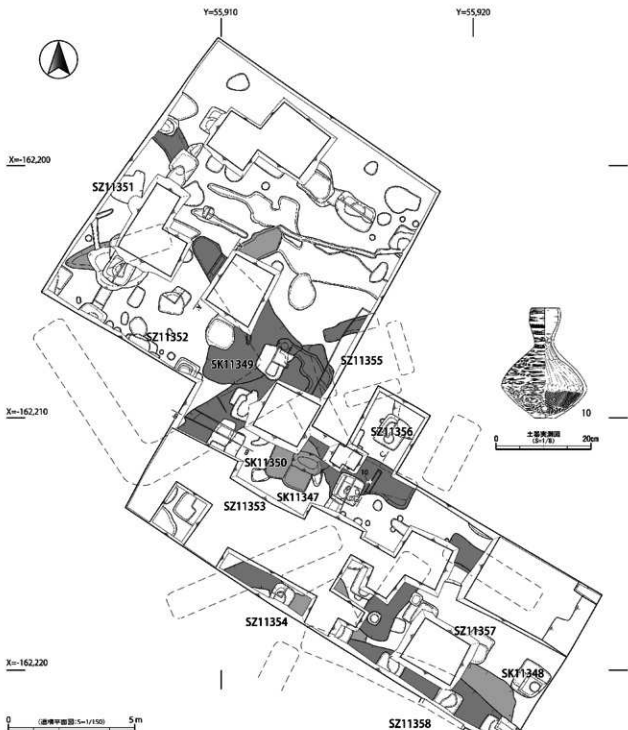
弥生時代中期前葉～中葉の土器が含まれるのは、土坑と方形周溝墓と推定される溝からであり、当該期以降の遺構の形成はB層上面から掘り込んでいることから、地層と遺構・遺物の認識は整合的に理解される。弥生土器は、遺物包含層や遺構のほか飛鳥時代以降の遺構や地層、後世の攪乱などからも出土している。

検出遺構は、遺構保護の観点により一部の部分掘削以外は上面の精査、検出のみに留めているため、遺構の輪郭が判然としないものも含まれる。調査時の所見を加味した上で、積極的な遺構の復元に努めたが、誤認の余地が残されている点には注意が必要である。こうした点に配慮しながら、方形周溝墓の墓群構成を示す基礎資料として報告する。

**S K 11347～11350** いずれも平面形が不整形な土坑と推定され、弥生時代前期後葉～中期前葉の土器を包含する。当該期の遺構形成は土坑を抽出できるが、遺構検出・掘削を最低限に留めているため、詳細な性格は不明である。

**S Z 11351～11358** 隅切れと四周の周溝をもつ方形周溝墓8基を検出した。北西～南東方向で帯状に並ぶ墓群形成がなされ、いずれも隣り合う周溝墓の周溝の重複あるいは共有を確認できる。隅切れは周溝内法間で全長3.5～6m、四周は全長6～8mを測り、隅切れよりも四周の一群の方が相対的に規模は大きい傾向で、周溝幅と深度も墓規模に比例している。いずれも中期中葉～後葉（貝田町式3期～回線文系1期）に比定される。溝の重複関係と墓群構成からS Z 11351～11354、S Z 11355～11357、S Z 11358の概ね3群に分けられる。そのように見た場合、S Z 11351～11354の列状を基点にS Z 11355～11357が後で差し込まれたように見受けられる。S Z 11358はS Z 11354とS Z 11357を破壊するよう大きく重複するので、時期差もしくは別の造墓集団によると推測できるかもしれない。

S Z 11356周溝内から口縁部を打ち欠き、あるいは胴部下半に焼成後穿孔を施した細頸壺（第Ⅱ-9図10）が横倒しで出土した。供献土器あるいは儀礼に供された土器と推定され、中期後葉（回線文系1期）に属するとみられる。このほか、いくつかの周



**【SZ11352 東側周溝】**



- 【SZ11352】(A-A')**
- 1 5YR5/4 灰い赤褐色 粘粒砂～シルト
  - 2 7.5YR5/4 灰い褐色 シルト (含砂) 比による原土
  - 3 7.5YR4/3 褐色 粘粒砂～シルト
  - 4 5YR5/6 褐色 粘粒砂～シルト
  - 5 10YR3/4 暗褐色 シルト (含砂) 10% 空孔
  - 6 10YR3/3 暗褐色 シルト
  - 7 10YR3/2 黒褐色 シルト
  - 8 7.5YR3/2 暗褐色 シルト
- C 層厚 10% 空孔

**【SZ11352 南側周溝】**

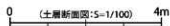


- 【SZ11352】(B-B')**
- 1 10YR3/2 黒褐色 粘粒砂～シルト (炭化灰 3% C 層厚 10%)
  - 2 10YR3/1 黒褐色 シルト (炭化灰 3% C 層厚 3%)
- 【SZ11352】(B-B')**
- 3 10YR3/4 暗褐色 シルト (C 層厚 1%)
  - 4 10YR3/2 暗褐色 シルト (炭化灰 3% C 層厚 2%)
  - 5 7.5YR3/1 褐色 シルト

**【SZ11356 南側周溝】**



- 【SZ11356】(C-C')**
- 1 10YR3/3 暗褐色 シルト (炭化灰 1% C 層厚 1%)
  - 2 10YR3/4 暗褐色 シルト (炭化灰 1% C 層厚 5%)
  - 3 10YR3/3 暗褐色 シルト (炭化灰 1% C 層厚 10%)
- C 層厚 10%



第Ⅱ-5図 SK11347～11350、SZ11351～11358 平面図 (1:150)・断面図 (1:100)



溝から中期中葉～後葉の土器片が少量出土した。破砕散布儀礼による土器片の可能性はあるが、特定するには至らない。

### (3) 古墳時代の遺構の不在

古墳時代に比定される遺構と遺物包含層は検出していない。ただし、調査地周辺の第85・8・192・195・197次調査では、5世紀後葉～6世紀前葉頃の堅穴建物・土坑で構成される居住域が存在することを確認しており、調査地もこれに含まれると予想される。特に第197次調査では、石製模造品の出土によって集落内祭祀の執行を想定できるようになった。飛鳥時代以降の遺構の形成や後世の擾乱・削平を被っているにも関わらず、3点の石製模造品の出土は潜在的に一定数の存在を予感させるものである。

第199次調査区では、古墳時代の遺構は確認できなかったため、こうした居住域の中心から外れる公算が大きい。ただし、遺物は極少量ながら出土しているので、集落外縁部に相当すると推定される。

### (4) 飛鳥時代の遺構

調査区全域で多数の柱穴（柱掘方と柱抜取穴）が設けられており、諸特徴による組み合わせから掘立柱塼2条、掘立柱建物4棟を確認した。柱掘方と柱抜取穴、一部の柱痕跡から飛鳥時代後期（降っても奈良時代初め）の土器片の出土をみるが、相対的に出土点数は僅少である。遺構検出面とした地山面までの地層除去の際に出土した土器が大半であることから、本来はこうした柱穴に包含されていた可能性が高い。柱穴の配置と重複関係などの特徴、出土遺物や周辺の既往調査の成果に基づく塼・建物軸の方位から、飛鳥時代後期～奈良時代初め頃に属する点は整合的である。

S A 6280・11120、S B 11361～11363は調査区西半（ $q \cdot r \cdot s3 \cdot 4 \cdot 5$ ）、S B 11360は調査区東半（ $p \cdot q \cdot r5 \cdot 6 \cdot 7$ ）で検出した。個々の掘立柱塼と掘立柱建物の詳細は、第II-6～8図・第II-2表を参照されたい。なお、本書で収録した調査成果は、令和3年度の第200次調査のデータを加味している。

S A 11120・S A 11300（掘立柱塼北辺）斜方位区画の掘立柱塼の北辺である。平成30年度の第193次調査で検出された掘立柱塼の北辺の延長線上に相当する。塼北辺は1回の建替えがあり、当初の塼をS A 11300、建替え後のものをS A 11120と表記している。本調査では峻別し難いので、便宜上S A 11120で統一した。

一部の柱穴は半截掘削により柱痕跡を確認しており、平面検出では柱抜取穴があるものとなないものが認められる。柱穴の重複関係から、ほぼ同地点に1回の建替えを認める。

北西角より東へ1つ目の柱穴（P 1）から陶硯（円面硯：第II-10図15）が出土した。脚部片であるが、透かしなど7世紀後半の特徴をもつ。立木による調査区の制限と樹木根の影響により、柱穴出土には違いないが、後述するI期遺構かII期遺構のいずれかは特定には至らず、少なくとも柱抜取穴ではなく柱掘方からの出土であると観察できる。出土した陶硯により、S A 11120の建立・廃絶時期の上限は7世紀後半と推測される。

S A 11120は、調査前の旧若宮八幡社参詣道の敷設軸と概ね合っている。ただし、近世以降の境内地整備に伴う盛土造成が成されていることから偶然といわざるを得ない。

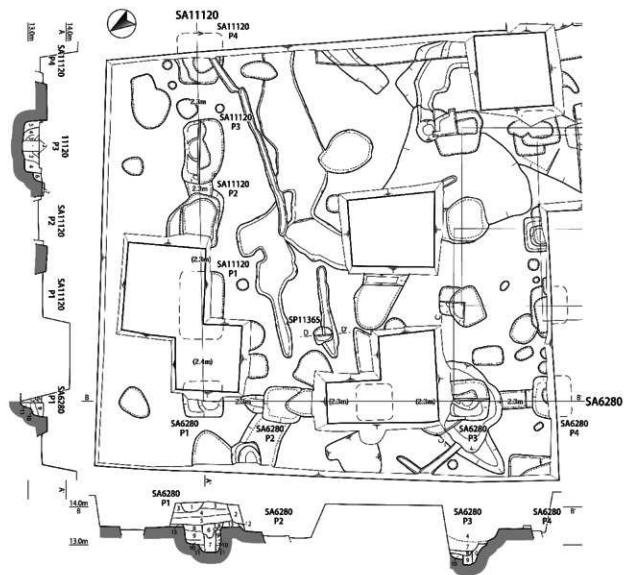
S A 6280（掘立柱塼西辺）斜方位区画の掘立柱塼の西辺である。平成2年度の第85・8次調査で検出された掘立柱塼の延長線上に相当する。布掘り構造（柱穴2つを繋ぐいわゆる溝持ち構造）あるいは柱筋溝状遺構をもち、北辺のS A 11120と東辺のS A 11310の構造と異にする特徴がある。こうした工法の違いは異なる設置時期が成因と推測される。

いずれも掘立柱塼の柱穴に重複する柱抜取穴を検出した。柱穴P 3の半截掘削では、柱穴下部に遺存する柱痕跡を確認した。柱抜取穴は柱穴底面には及ばない範囲で一定程度の掘削を行った後に、柱を切断したものと推測される。

北西角から南へ1つ目の柱穴（P 2）の柱抜取穴から須臾器杯B（第II-10図11）が出土した。これにより廃絶時期は飛鳥Vに位置付けられ、7世紀後葉～8世紀前葉に属するとみられる。

第85・8次調査は完掘状況のみの記録しかなく判然としないが、平・断面図からみると重複する柱穴の存在を類推できることから、少なくとも1回の建替えがあったと考えられる。

S B 11360（正殿）5×4間の東西棟で、南北二面に南をもつ掘立柱建物である。斜方位区画の中心的建物となる。建物構成からI期遺構の斜方位区画の北側中央に配置された正殿と推定される。建替えはなく、II期に変遷してもそのまま機能していたと考えられる。いずれの柱穴にも柱抜取穴が及んでおり、西妻柱中央の柱抜取穴には明黄褐色シルトとともに拳大礫が多数含まれている。本来、掘立柱建物には明黄褐色シルトで構成される基礎状あるいは亀



**(SA11120) (A-A)**

- P3**
- 1 2.5YR3/3 灰褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 10% C 層厚 7%) 【柱礎】
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 5% C 層厚 3%)
  - 3 2.5YR3/4 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 5% C 層厚 10%)
  - 4 2.5YR3/3 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 5% C 層厚 3%)
  - 5 10YR3/2 黒褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 7% C 層厚 5%)
  - 6 10YR4/1 褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 1% C 層厚 10%)
  - 7 7.5YR4/1 褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 1% C 層厚 10%) (黒含む)

**(SA6280) (B-B')**

- P1**
- 1 10YR6/2 灰黄褐色 細粒砂-シルト
  - 2 10YR6/1 褐色 細粒砂-シルト
  - 3 10YR7/3 に近い褐色 細粒砂-シルト
  - 4 7.5YR5/4 に近い褐色 シルトと 7.5YR3/3 暗褐色 シルト (赤褐色) による混雑土 (C 層厚 1%)
  - 5 7.5YR5/4 に近い褐色 シルトと 7.5YR3/3 暗褐色 シルト (赤褐色) による混雑土
  - 6 10YR7/4 に近い褐色 シルト
  - 7 10YR3/4 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 10% C 層厚 7%) 【柱礎】
  - 8 10YR4/2 灰褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 5% C 層厚 3%)
  - 9 2.5YR3/3 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 5% C 層厚 1%)
  - 10 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 5% C 層厚 3%)
  - 11 2.5YR3/3 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 2% C 層厚 3%)
  - 12 2.5YR3/3 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 3% C 層厚 5%)
  - 13 7.5YR3/4 暗褐色 シルトに C 層厚 炭化灰 10% 含む

**(SP11365) (D-D')**

- P3**
- 1 10YR3/3 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 1% C 層厚 3%) 【柱礎】
  - 2 10YR3/4 暗褐色 細粒砂-シルト (C 層厚 1%) C 層厚 1%

**(SA6280) (B-B')**

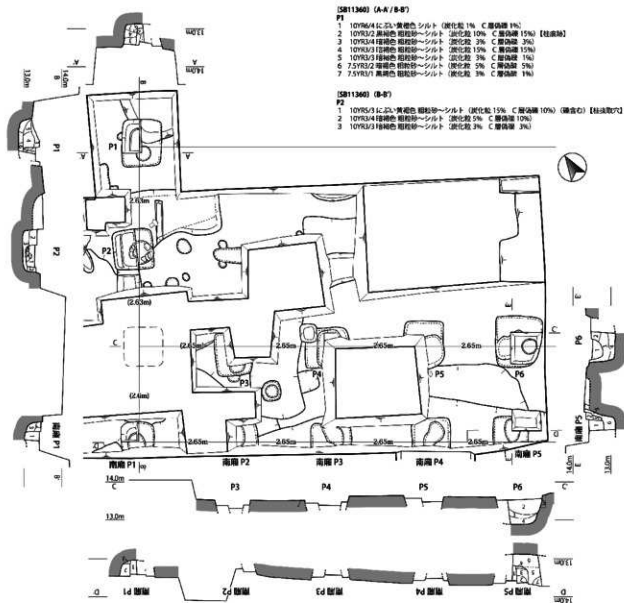
- P3**
- 1 5YR4/2 灰褐色 細粒砂-シルト (黒含む)
  - 2 7.5YR4/1 褐色 細粒砂-シルト (黒含む)
  - 3 10YR6/1 褐色 細粒砂-シルト (黒含む)
  - 4 10YR6/1 褐色 細粒砂-シルト (黒含む)
  - 5 5YR5/4 に近い褐色 細粒砂-シルト
  - 6 7.5YR5/4 に近い褐色 シルトと 7.5YR3/3 暗褐色 シルト (赤褐色) による混雑土 (C 層厚 2%)
  - 7 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂-シルト (黒含む)
  - 8 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 7% C 層厚 3%)
  - 9 2.5YR3/3 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 10% C 層厚 3%) 【柱礎】
  - 10 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂-シルト (炭化灰 3% C 層厚 3%)

第二-6図 SA6280・11120平面・断面図 (1:100)

腹状の高まり（化粧土を含む）があり、その周囲に礎敷を施したものと推測される。なお、調査区の制約もあって、床東柱の検出はなしなかった。

S B 11360の西妻柱 P 2 の柱抜取穴から土師器杯 G（第 II - 10 図 18）、身舎の柱穴 P 6 の柱掘方から須恵器高杯（第 II - 10 図 22）が出土した。土師器杯 G は

口縁部が内彎して椀状に深いようであり、須恵器高杯は小型化した明気 3 号窯や明気 5 号窯跡出土品に相当することから、7 世紀後半～8 世紀前葉に位置付けられる。これにより S B 11360 の建立時期の上限は 7 世紀後半、廃絶時期の下限は 7 世紀後半～8 世紀前葉に比定される。



SB11360 (A-N / B-F)

P1

- 1 10YR6/4 灰褐色シルト (炭化粒 1% C 層含率 1%)
- 2 10YR3/2 黒褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 10% C 層含率 15%) 【柱掘跡】
- 3 10YR3/4 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 3% C 層含率 3%)
- 4 10YR3/3 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 15% C 層含率 15%)
- 5 10YR3/3 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 3% C 層含率 1%)
- 6 7.5YR3/2 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 5% C 層含率 5%)
- 7 7.5YR3/1 黒褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 3% C 層含率 1%)

SB11360 (B-F)

P2

- 1 10YR3/3 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 15% C 層含率 10%) (鎌倉) 【柱掘跡7d】
- 2 10YR3/4 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 5% C 層含率 10%)
- 3 10YR3/3 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 3% C 層含率 3%)

SB11360 (B-F / D-F)

南廊 P1

- 1 10YR3/2 黒褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 5% C 層含率 3%) 【柱掘跡】
- 2 10YR3/3 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 1% C 層含率 3%)
- 3 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 3% C 層含率 1%)

SB11360 (C-C / E-E)

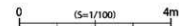
P4

- 1 10YR3/3 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 5% C 層含率 3%) 【柱抜取7d】
- 2 10YR3/4 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 15% C 層含率 30%)
- 3 10YR3/3 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 3% C 層含率 3%)
- 4 10YR3/2 暗褐色 粗粒砂-シルト (炭化粒 15% C 層含率 50%)
- 5 7.5YR4/3 褐色 粗粒砂-シルト 【地】

SB11360 (D-D / E-E)

南廊 P5

- 1 10YR3/3 暗褐色 シルト (炭化粒 1% C 層含率 1%) 【柱掘跡7f】
- 2 10YR3/3 暗褐色 シルト (炭化粒 1%)
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト (炭化粒 1% C 層含率 1%)
- 4 10YR2/2 黒褐色 シルト
- 5 10YR3/1 黒褐色 シルト
- 6 10YR3/1 黒褐色 シルト



第 II - 7 図 SB11360 平面・断面図 (1 : 100)

**SB11361 (西第1堂(新))** SB11110 (東第1堂)と対をなす配置構成から、西第1堂の建替え後の殿舎と推測され、Ⅱ期遺構に相当する。SB11110と同様の構造をとる可能性が高く、6×2間の南北棟の掘立柱建物とみられる。SB11110・SB11015 (東第2堂)には溝(目隠溝)が付随する一方、SB11361にはそのような造作がみられない。いずれも建物柱穴に重複する柱抜取穴を検出したが、半截掘削によると抜取穴が深く及んでおり、柱痕跡は確認できなかった。

SB11361の北西妻柱P1の柱抜取穴から須恵器杯G(第Ⅱ-10図34)が出土した。明気3号窯跡出土品に相当するとみられるため、SB11361の廃絶時期の下限は7世紀後葉～8世紀前葉に比定される。SB11360と廃絶時期は概ね符合することになる。

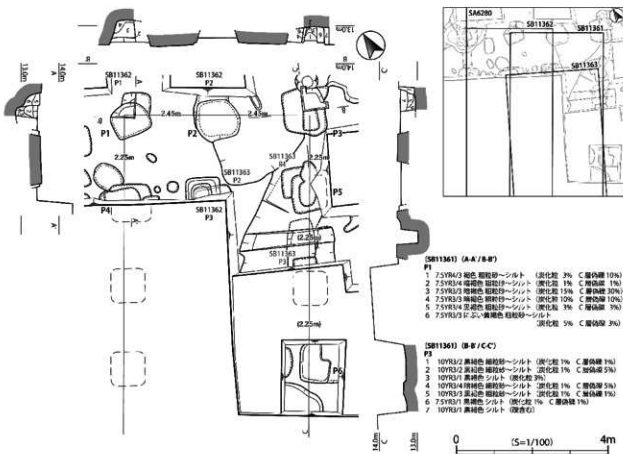
柱穴の重複関係から、SB11361は後述するSB11362から東へ約2.7mずらした位置に建替えられたと推測される。

**SB11362 (西第1堂(古))** 6×2間とみられる南北棟の掘立柱建物で、柱穴の重複関係からSB11361に建替えられる前の建物遺構である。SB11110

(東第1堂)と対をなす配置をとり、SB11110やSB11361と同等の規模・構造をとる可能性が高い。建物配置と柱穴の重複関係からⅠ期遺構に相当する。建物柱穴に重複する柱抜取穴を検出しており、半截掘削によると柱抜取穴が柱掘方より深く及ぶとともに、すべて明黄褐色シルトで充填されていた。それにより柱痕跡は遺存していなかった。

**SB11363 (西第1堂(古)に先行する殿舎)** 2間以上×2間の南北棟の掘立柱建物と推測される。建物軸が斜方位区画及びSB11361・11362とは異なることから、これらと一定の時期差があると想定される。SB11361・11362の設置場所と大きく違わない特徴をもつが、柱穴の重複関係からこれらに先行することは明らかであり、畜宮中板城の脇殿相当ではなく畜宮成立以前の前身施設の可能性がある。ただし、出土遺物から所属時期を特定するには至らない。

**SP11364 (建物柱穴)** 調査区南西隅で検出した平面形が隅丸方形を呈するとみられるビットである。埋土は黒褐色シルトを主体とし、中央付近の上面から明黄褐色シルトを埋土とする別のビットが重複する。これらの特徴から、柱抜取穴をもつ柱掘方と推



第Ⅱ-8図 SB11361平面・断面図(1:100)

定され、建物柱穴の可能性が高い。検出した柱穴の北側は浅く段掘りとなるが、南側は深く壺掘り状を呈することから、本来の柱穴は南側と推測される。そうすると、壺掘り箇所はSB 11363の北妻側と軸が合うことから、柱間寸法より同一の建物とみるよ

りかは、同時期に建物軸を描いて配置された別の掘立柱建物が存在する可能性が考えられる。つまり、SP 11364を建物北東隅の柱穴として復元すると、斎宮成立以前に掘立柱建物が2棟配列することになる。あたかも公的施設とみられる前身施設の存在が

遺構名	調査時遺構名	基部構造	建物形式	平面形式	桁行間数 柱間	桁行総長	梁行間数 柱間	梁行総長	備考	遺構の性格
SA 11120 11300	塀2	掘立	一本柱塀	—	4間 2.3m	9m以上			北辺 建替(新・古)	遮蔽
SA 6280	塀1	掘立	一本柱塀	—	4間 2.2~2.3m	9m以上			西辺 建替(新・古)	
SB 11360	建物3	掘立	側柱	二面廂	5間 2.65m	13.25m	4間 2.6~2.63m	5.3m (10.4m廂含む)		正殿
SB 11361	建物1 (新)	掘立	側柱	無廂	6間 2.26m	13.6m	2間 2.45m	4.9m	建替後(新)	西第1堂 (新)
SB 11362	建物1 (古)	掘立	側柱	無廂	6間 2.26m	13.6m	2間 2.3m	4.6m	建替前(古)	西第1堂 (古)
SB 11363	建物2	掘立	側柱	無廂	2間以上 2.2~2.3m	4.5m以上	2間 4.5~2.5m	4.2m		前身施設?

第Ⅱ-1表 第199次調査 建物等一覧表

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物
SK 11347	溝5	d3・4	弥生時代前・中期	弥生土器
SK 11348	土坑	e5・6, f5・6	弥生時代前期	弥生土器
SK 11349	堅穴1	e2・3	弥生時代前期	弥生土器
SK 11350	溝7	e3・4, d3・4	弥生時代中期	弥生土器
SZ 11351	溝6	b25・1, c25・1	弥生時代前期	弥生土器
SZ 11352	溝2	e1・2	弥生時代中期	弥生土器
SZ 11353	溝9	d3	弥生時代中期	弥生土器
SZ 11354	溝	e4・5	弥生時代中期	弥生土器
SZ 11355	溝11	d2	弥生時代中期	弥生土器
SZ 11356	溝4	d3・4, e3・4	弥生時代中期	弥生土器
SZ 11357	溝	d5, e4・5, f4	弥生時代中期	弥生土器
SZ 11358	溝	d5, e5・6, f5・6	弥生時代中期	弥生土器
SA 11120 11300	塀2	e25, c1, d25・1, e1	飛鳥時代後期	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶硯
SA 6280	塀1	b1・2, c25・1	飛鳥時代後期	縄文土器・弥生土器・土師器
SB 11360	建物3	d4・5, e3~6, f4~6	飛鳥時代後期	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器
SB 11361	建物1(新)	b2, c2~4, d2	飛鳥時代後期	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器
SB 11362	建物1(古)	b2, c2~4, d2	飛鳥時代後期	弥生土器・土師器・須恵器
SB 11363	建物2	b1・2, c2・3	飛鳥時代後期	弥生土器・土師器・須恵器
SP 11364	土坑4	a2, b2	飛鳥時代後期	弥生土器・土師器

第Ⅱ-2表 第199次調査 遺構一覧表

浮上するが、ひとまずここでは可能性の指摘のみに留めておく。

#### (5) 鎌倉時代以降の遺構と関連地層

中世以降の土器は山茶碗を中心として出土しているが、いずれも表土あるいは遺物包含層の掘削時に出土したものである。周辺の調査区では、溝・土坑を中心とした鎌倉時代以降の遺構は確認されているが、本調査区では乏しい状況にある。

調査地は旧若宮八幡神社の境内地にあたり、盛土造成によって整備されていることが分かっている。盛土・造成土層中より近世の陶磁器や焙烙の包含をみたが、中世に遡る遺物は見出せなかった。ただし、若宮八幡神社の創祀が中世に遡るとみるならば、屋敷地などの中世遺構が形成されなかった可能性がある。

## 4 遺物

遺物整理用コンテナ27箱分の遺物が出土し、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁（円面硯）、青磁、中世陶器、近世陶磁、瓦、土製品（土錘）、石製品（砥石）、鉄製品（不明鉄器）、銭貨（寛永通宝）があった。遺構番号順に主な時代ごとに分けて詳述する（第Ⅱ-9～13図）。なお、ここでは特徴的な遺物のみ記述する。

#### (1) 弥生時代の遺構（第Ⅱ-9図）

**SK11347出土遺物（1）** 弥生土器の壺口縁部片で、弥生時代前期後葉～中期前葉に属する。

**SK11348出土遺物（2）** 弥生土器の壺底部片で、弥生時代前期後葉～中期前葉に属する。

**SK11349出土遺物（3）** 弥生土器の壺胴部片で、

櫛描直線文を4帯以上施す。中期前葉に属する。

**SK11350出土遺物（4）** 弥生土器の甕口縁部片で、端部に刻目を施す。中期前葉に属する。

**SZ11352出土遺物（5～9）** 5・6・9は弥生土器の壺胴部片、7は口縁部片である。5は貝殻櫛直線文・波状文、6・9は櫛描直線文を施す。7は口縁端部に篋描沈線3条、口縁下端部に刻目を配する。弥生時代中期中葉～後葉に属する。

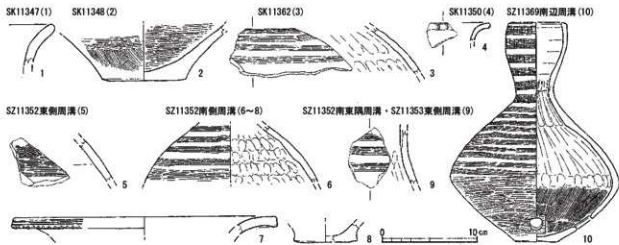
**SZ11356出土遺物（10）** 弥生土器の細頸壺で、算盤玉形の胴部にやや袋状の口縁部がつく形態である。口縁部から頸部に櫛描簾状文6帯、胴部に櫛描直線文10帯を施す。弥生時代中期後葉に属する。

#### (2) 飛鳥時代の遺構（第Ⅱ-10図）

**SA6280出土遺物（11～14）** 11は須恵器杯Bで、高台は接地面を底全面として外に踏ん張る形態、12は須恵器杯Gの底部片であり、7世紀後葉～8世紀前葉の特徴をもつ。どちらもSA6280の柱抜取穴からの出土で、廃絶時期の下限を示す遺物である。

**SA11120出土遺物（15～17）** 15は須恵器圈足円面硯である。脚部の掘付近に圈線2条をめぐらし、脚部中央には十字形の透孔が横列に穿たれて、その下には圈線1条で画している。7世紀後葉の所産とみられ、SA11120の柱掘方からの出土であることから、建立時期の上限を示す遺物である。17は8世紀前葉頃とみられる土師器皿の口縁部片で、廃絶時期前葉の所産で廃絶時期の下限を示している。

**SB11360出土遺物（18～32）** 18は身倉柱抜取穴出土の土師器杯Gの口縁部片、22は身倉柱掘方出土の須恵器高杯の杯部片、27・30は廂柱掘方出土の須恵器杯H蓋と土師器杯Gの口縁部片である。いずれ



第Ⅱ-9図 第199次調査 出土遺物実測図1 (1:4)

も7世紀後半～8世紀前葉の特徴をもつ。SB11360の建立/廃絶時期を示す遺物である。

**SB11361出土遺物 (33～40)** 34は柱抜取穴出土の須恵器杯Gである。法量が10cmに満たない小型化したもので、7世紀後葉～8世紀前葉の特徴をもつ。SB11361の廃絶時期の下限を示す。

**SB11363出土遺物 (41)** SB11363の建立/廃絶時期を示す遺物はなく、柱掘方から中期中葉の弥生土器の壺口縁部片が出土したのみである。

**SP11364出土遺物 (42)** 壺口縁部～胴部片である。口縁部の外反は弱く、球状の胴部は張らない小型の壺とみられ、口縁端部の肥厚や器面の調整手法などから7世紀後半頃の所産と推測される。

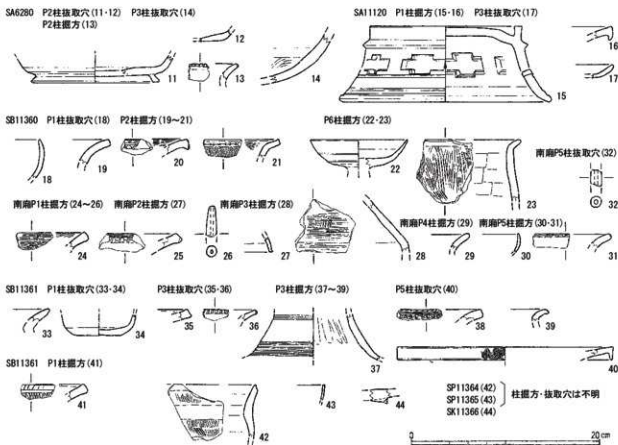
**SP11365出土遺物 (43)** 須恵器杯Gの口縁部片である。

**SK11366出土遺物 (44)** 須恵器台付壺の底部片とみられる。

### (3) 遺物包含層 (第II-11・12図)

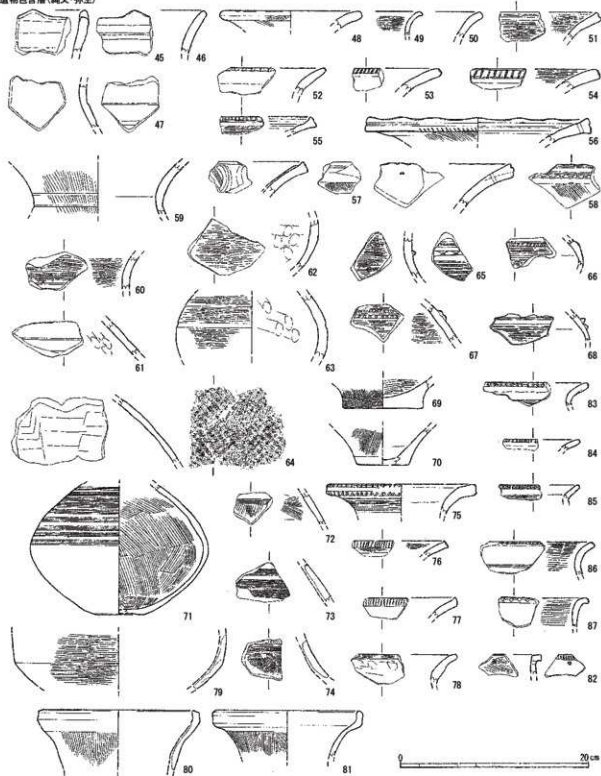
遺物包含層出土遺物〔縄文・弥生〕(45～87) 45～47は縄文時代中期後葉の深鉢片である。45は波状口

縁で外面に沈線2条を施す。46・47は単口縁で頸部がわずかに窄まる形態となる。北白川C式に相当するとみられる。48～69は前期後葉～中期前葉の弥生土器である。55～58・64・66は金剛板式に相当し、これら以外は遠賀川系である。57は口縁部に漏斗状の内面突帯、64は外面に半截竹管による斜格文・直線文・複線山形文を配する。71～87は中期前葉～後葉の弥生土器である。75・76は中期前葉の朝日式、77・78・86・87は中期中葉の貝田町式1期、71・79～82は中期中葉～後葉の貝田町式3期～凹線文系1期に相当する。71・80・81については、おそらく本来は方形周溝墓の周溝に包含されていた可能性が推測される。  
遺物包含層出土遺物〔古墳～近世〕(88～121) 88・89は6世紀の土師器甕、99～101は5～6世紀の須恵器甕である。97・98は土師質の髑髏土管、102・103は須恵器杯G、104は杯G蓋で、いずれも飛鳥IV～Vにあたり、7世紀後半～8世紀前葉の所産である。105・106は青磁碗で、奈良～平安時代のものである。108～111は陶器山茶碗、112・113は燈明皿、114は南伊勢系鍋で中世に属する。115・116は焙烙、117は陶器甕で近世の所産とみられる。118は土鐘。



第II-10図 第199次調査 出土遺物実測図2 (1:4)

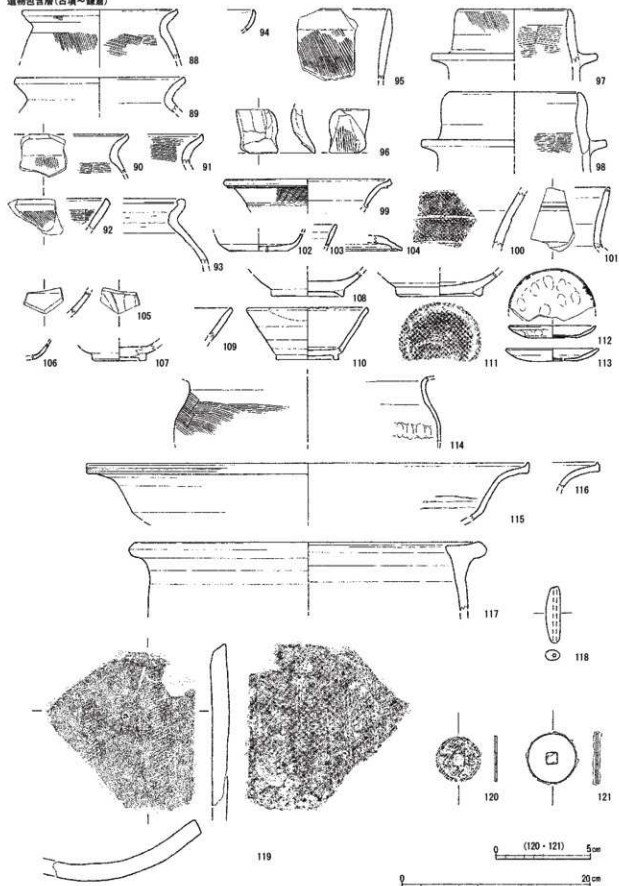
遺物包含層(縄文・弥生)



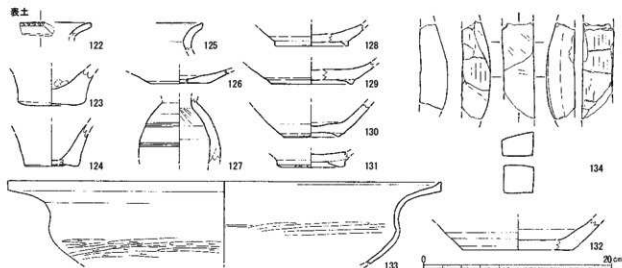
第II-11圖 第199次調査 出土遺物実測圖3 (1:4)



遺物包含層(古墳~鎌倉)



第II-12図 第199次調査 出土遺物実測図4 (1:4 120・121は1:2)



第II-13図 第199次調査 出土遺物実測図5 (1:4)

119は凸面縄目、凹面タタキ目の平瓦で、奈良時代のものか、120・121は銭貨。

#### (4) 表土 (第II-13図)

表土出土遺物 (122~134) 122~125は弥生土器、126・127は須恵器壺。128~131は陶器山茶碗。132は陶器壺。133は焙烙。134は砂岩製の砥石。

## 5 まとめ

### (1) 弥生時代前期と古墳時代中～後期の集落構成、弥生時代中期の墓群構成

第199次調査地周辺では、弥生・古墳時代の遺構の分布が広範に認められる (第II-14図)。

第195次調査地から第100次調査地にかけて、東西約90mの範囲で弥生時代前期後葉～中期前葉の竪穴建物と土坑で構成される集落が認められる。

第193・195・197次調査地では、複数の方形周溝墓が検出されており、今回を含めて墓群形成の把握とその構成が復元できるようになった。中期中葉～後葉の墓群形成があり、地形環境に即して北西～南東方向に帯状の墓群構成をとる特徴がある。第197次調査地では周溝墓の帯状展開と同様の方向で土坑が等間隔でし字状に並ぶ。L字状配列の土坑群の西・南側には墓群が展開しないので、墓地を画する構造物かもしれない。

第192・195・197次調査地では、古墳時代中期後葉～後期前葉の竪穴建物・土坑で構成される集落が東西約80mの範囲で確認される。土師器高杯が出土の中心になる土坑や石製模造品の出土から、集落内祭祀の状況が認められる。

### (2) 飛鳥時代遺構の構造・規模・変遷

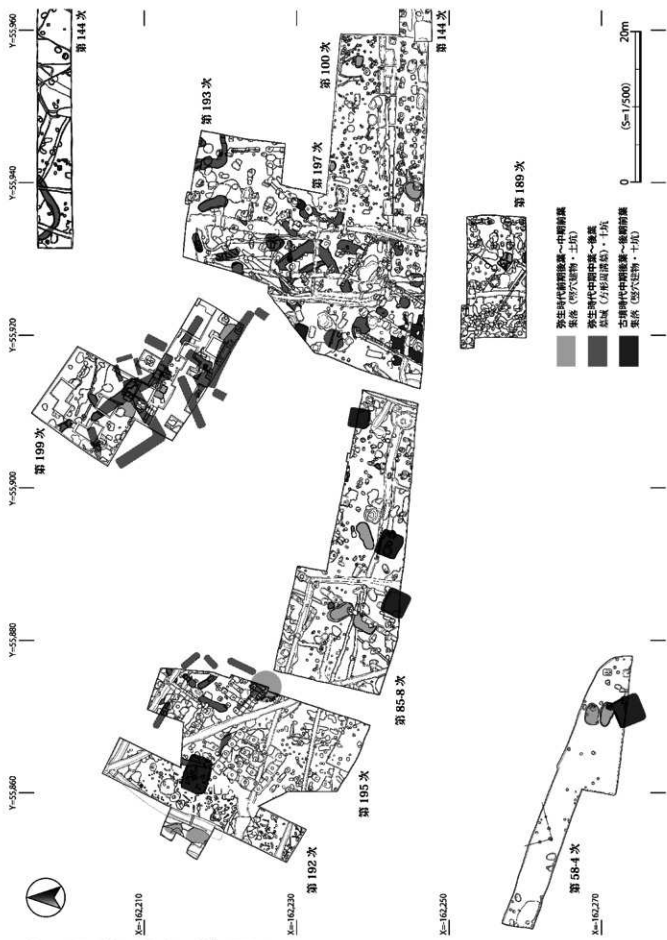
第199次調査では、斜方位区画の北西角を構成する掘立柱塼、正殿と推定される東西棟の庖付建物、西脇殿とみられる南北棟の掘立柱建物を確認した。斜方位区画の構造と規模、区画内部の建物構成と変遷を推定できるようになり、特に正殿と推定される中心建物を確認できたことが重要な成果である (第II-15・16図)。

**斜方位区画の構造** 正殿・外周建物 (南北3棟並びが2列) を掘立柱塼で遮蔽した構造をもつ。斜方位区画の西側には総柱建物群 (倉院) を配置する。区画内部の建物配置は、正殿身舎の北側柱筋と東・西第1堂の北妻柱筋を合わせたコの字型建物配置をとる。

掘立柱塼の北・西辺は柱間2.3mで柱穴を配し、同一地点に1回の建替えを伴う。塼西辺には柱穴間を繋ぐ溝 (柱筋溝状遺構) があり、地覆あるいは壁材の据え付け痕跡の可能性もあるが、柱穴との重複関係から、塼設置のための当初の計画線とみられる。**正殿の構造と規模** 5×4間 (推定13.2m×10.4m) の東西棟とみられ、南北の二面に廂をもつ掘立柱建物となる。平面積は身舎で約69.9㎡、廂を含めると約138㎡と推定される。

**西第1・2堂の構造と規模** 東第1・2堂と同等の構造・規模とみられ、S B11361は6間×2間 (推定13.6m×4.9m) の南北棟の掘立柱建物となる。平面積は約66.6㎡と推測される。S B11362は6間×2間 (推定13.6m×4.6m) の南北棟の掘立柱建物となる。平面積は約62.6㎡と推測される。

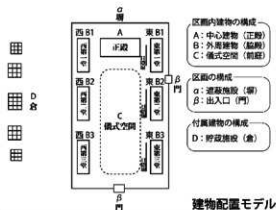
S B11362より先行するS B11363は、推定6間×2間 (推定13.2m×4.9m) の南北棟の掘立柱建物



第II-14図 弥生・古墳時代の遺構配置図 (1:500)



第II-15図 飛鳥時代の斎宮中樞域の構造 (1:500)



## 飛鳥時代の斜方位区画と倉院の変遷モデル

### ※ コの字型建物配置

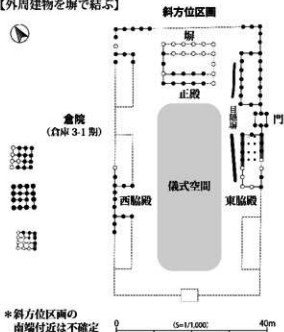
外周建物は南北棟で南北方向に各3棟 (計6棟) を配置

### ※ 南・北・西辺の塀は位置を固定し、東辺のみ拡張する

外周建物の欄柱列を塀で繋いで囲う (I期)  
→ 塀の東辺を新設して外周建物を囲う (II期)

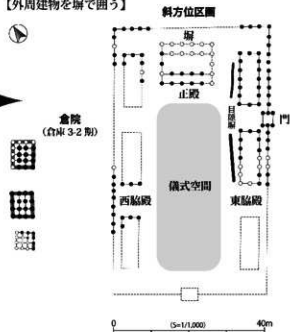
## I期 (II期以前 (7世紀後半~))

【外周建物を塀で結ぶ】



## II期 (7世紀後半~8世紀初)

【外周建物を塀で囲う】



第II-16図 飛鳥時代の斜方位区画と倉院の変遷過程 (1:1,000)

で、平面積は64.6㎡程度と推測される。建物軸は北で東に29°振っており、SB11361・11362と4°程度の差がある。建物方位からみても斜方位区画に伴うものではなく、前身施設の可能性がある。斜方位区画・倉庫の変遷 外周建物と倉庫群の柱穴の重複関係と出土土器から、斜方位区画と倉院は2段階の変遷が推定され、I期遺構・II期遺構に峻別できる。ほぼ同地点に建物の建替え、あるいは少し位置をずらした配置をとり、斜方位区画 (正殿・外周建物) と倉院の全体的な構成は変えない点の特徴である。斎宮関連の倉庫は倉庫3期にあり、斜方位区画の変遷に対応するとみられる。I期はII期以前 (都城編年の飛鳥IV以前)、II期は飛鳥IV~Vと推定される。

I期 (II期以前 (7C後か)) コの字に正殿・外周

建物を配置し、外周建物を塀で結んだ構成 (側柱連結型) となるが、塀北辺は正殿・外周建物の外をめぐる。倉庫は3×3間で統一される段階である (倉庫3-1期)。

II期 (7C後~8C初) I期遺構を範型としつつ塀の東辺を外に拡張し、外周建物を塀で囲んだ構成となる。倉庫は3×3間を基調としながら、新たに4×3間が設けられる (倉庫3-2期)。

斜方位区画の規模 I期は東西長約38.2m、II期は東西長約40.8mを測る。南北長は54.2m以上となるが、未調査のため確定には至っていない。

### (3) 「斜方位区画」の性格

正殿と東第1堂以外、つまり掘立柱塀の北・西辺と外周建物の多くは1回の建替え、斎宮関連の倉庫

も1回の建替えがあり、2段階の変遷を認める。こうした斜方位区画の塀・建物の構成と変遷は、いくつかの案が想定できるが、今後も発掘調査を行うことで検証を進めていく方針である。

斜方位区画の構造として、1期(複数の外周建物を塀で繋いで囲う構造の段階)は、下本谷遺跡(備後国三次郡衙)の郡庁や戸島遺跡(因幡国気多郡衙の出先施設(支所))の政庁などに似ている。畜宮跡の斜方位区画の東西規模は、郡庁の一般的な規模より一回り狭く、いわば戸島遺跡(評衙支所)の政庁などに近い。そうすると斜方位区画を政庁とみた場合、官衙としての等級とその政庁規模との間わりはどうかになっているのか、といった問題が生じる。

初期国庁に郡庁と類似した規模や構造をとる事例があることを考慮すると、7世紀段階では地方官衙の政庁には、まだ格差が明確に反映されていない段階にあったのかもしれない。あるいは、規模や倉との併存関係を考えると、ミヤケとしての性格を示す可能性もあるし、皇子宮のような宮殿域を意識しているようにも窺える。つまり官衙施設ではなく、畜王のための空間(宮殿域の可能性を残すが、主として儀式空間)であり、のちの「内院」に当たるものと考えられる。

飛鳥地域にみられる7世紀代の皇子宮あるいは離宮などの宮殿、官衙、上級貴族の邸宅といった性格が想定される「コ」の字型建物配置を畜宮でも採用する。少なくとも区画内部の正殿や外周建物の軒下付近には、礎敷き・石敷きがあった可能性があり、儀式空間としての空間の荘厳化が窺える。

斜方位区画の重要な観点は、東第1・2堂のみ西側柱筋に沿うよう小溝が掘られ、「目隠塀」とみられる構造物が設置されることである。第199次調査の西第1堂には「目隠塀」が伴わない。つまり東第1・2堂内の出入口を隠す意図が考えられる。正殿を畜王のための施設とするならば、東第1・2堂は女官のための施設(畜王の控えの殿舎か)という仮説が成り立つ。西1・2堂は入口がオープンであるとみられるため、あえて仮説を示すならば、臨時の男官や勅使のための施設といえるかもしれない。

飛鳥時代の掘立柱建物は、床東で支える床張り構造の建物と推定されており、桁行の長い正殿や外周建物内は着座で使用したことになる。畜王(天皇)を頂点として女官・男官・勅使参加による儀式のために適した空間構造といえる。

そうすると儀式など立位で整列するのは建物外となる。いずれにしても、斜方位区画は儀式空間の可

能性が考えられ、これは7世紀末～8世紀初め頃の藤原宮といった飛鳥地域の宮殿遺跡を参考にしても、中心建物の正殿の前面(前庭)は、儀式を行う空間だと推定される。

#### (4) 飛鳥時代の畜宮関連遺構をめぐる調査成果と今後の課題

本調査と周辺の発掘調査成果により、飛鳥時代の斜方位区画(掘立柱塀と正殿・外周建物)・倉院の空間構成とその構造、遺構の変遷が大まかに想定できるようになった。斜方位区画は畜王の儀式空間と推測され、畜宮の成立や伊勢神宮との関係を考える上で、重要な調査成果が得られたといえる。

本調査では正殿・西第1・2堂の建物遺構の全容把握には至っていないため、もう少し区画内部の構造解明を進める必要がある。塀と正殿、東・西の殿舎の配置と遮蔽工法及びその変遷、区画の出入口や儀式空間の詳細と正殿前建物の有無、また区画外周部において区画に随伴する施設(井戸・池泉など儀礼空間)の有無確認、倉院の範囲の把握など、今後の課題が山積している状態である。そのなかでも畜王の宮殿の特定が最も重要な課題となる。

まずは、正報告書によって検出遺構の時期の特定や変遷などを考古学的手法で正確に位置付けることが急務といえる。

#### 参考文献

- 相原嘉之 2017『古代飛鳥の都市構造』吉川弘文館
- 大橋泰夫 2018『古代国府の成立と国郡制』吉川弘文館
- 小笠原好彦 2015『日本の古代宮都と文物』吉川弘文館
- 小澤 毅 2003『日本古代宮都構造の研究』青木書店
- 小澤 毅 2018『古代宮都と関連遺跡の研究』吉川弘文館
- 小田裕樹 2020『飛鳥地域におけるコの字形配置の建物群について-雷丘北方遺跡を中心に-』『藤波宮と古代都城』同成社
- 川部浩司 2020『考古学からみた伊勢神宮と畜宮の成立過程』『畜宮と古代国家-飛鳥・奈良時代の畜宮を探る』(国史跡畜宮跡発掘50周年記念特別展図録) 畜宮歴史博物館
- 畜宮歴史博物館 2022『史跡畜宮跡第200次発掘調査現地説明会資料』
- 重見 泰 2020『日本古代都城の形成と王権』吉川弘文館
- 林部 均 2001『古代宮都形成過程の研究』青木書店
- 林部 均 2008『飛鳥の宮と藤原京-よみがえる古代王宮-』吉川弘文館
- 山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

番号	器種	器形	遺構	出土量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	弥生土器	壺	SK1347	残存高 4.4	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	オナベ 第337/1	白緑色 1/12	—	—	005-02
2	弥生土器	壺	SK1348	残存高 5.9	口径 6.9 底径 5.9 外面：ヘラミダキ、ハケのちナデ 内面：ヘラミダキ	赤 良	江崎47.035/4	灰褐色 —	底面不明	—	007-04
3	弥生土器	壺	SK1349	残存高 5.9	外面：ナデ・磨蝕成線文 内面：ナデ	赤 良	江崎47.035/4	—	磨蝕成線文3 条1角	—	007-03
4	弥生土器	壺	SK1350	残存高 2.1	外面：ナデ、刷目 内面：ナデ	赤 良	江崎47.036/4	白緑色 1/12未満	—	—	005-09
5	弥生土器	壺	SK1352 表面刷目	残存高 4.7	外面：ナデ・磨蝕成線文・磨蝕成線文 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/3	—	—	—	005-06
6	弥生土器	壺	SK1352 表面刷目	残存高 6.4	外面：ナデ、ヘラミダキ・磨蝕成線文 内面：ナデ	赤 良	江崎47.035/4	褐色 3/12	—	—	004-02
7	弥生土器	壺	SK1352 表面刷目	想定口径 27.4 残存高 1.9	外面：ハケのちナデ・刷目 内面：ハケのちナデ	赤 良	江崎2.032/6	白緑色 1/12	—	—	005-07
8	弥生土器	壺	SK1352 表面刷目	想定口径 4.8 残存高 2.0	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	江崎47.036/4	褐色/12 黄褐色(11/12)	—	—	005-08
9	弥生土器	壺	SK1352 表面刷目	残存高 5.7	外面：ナデ・磨蝕成線文 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/4	—	—	—	005-05
10	弥生土器	壺	SK1356 表面刷目	口径 5.4 底径 4.6 外面：ナデ、ヘラミダキ・磨蝕成線文・磨蝕成線文 内面：ナデ	赤 良	江崎086/6	—	—	—	—	004-01
11	須恵器	杯	SM280 P2柱状穴	想定口径 12.3 残存高 2.9	外面：コクロナデ 内面：コクロナデ	赤 良	江崎6/1	灰褐色 1/12	—	—	002-06
12	須恵器	杯	SM280 P2柱状穴	残存高 1.3	外面：コクロナデ・ヘラ切り 内面：コクロナデ	赤 良	真珠2.031/1	—	—	—	002-07
13	弥生土器	壺	SM280 P2柱状穴	残存高 1.9	外面：ナデ、刷目 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/4	白緑色 1/12未満	—	—	003-01
14	須恵器	壺	SM280 P2柱状穴	残存高 3.9	外面：タタキのナデ 内面：タタキのナデ	赤 良	浅黄2.037/3	—	—	—	002-08
15	陶磁	門磁	SA1120 P1柱状穴	口径 21.4 残存高 3.4	外面：コクロナデ・ヘラ切り 内面：コクロナデ・ヘラ切り	赤 良	江崎6/1	灰褐色 2/12	十字型の透孔	—	002-02
16	弥生土器	壺	SA1120 P1柱状穴	残存高 1.9	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	明黄緑036/6	白緑色 1/12未満	—	—	002-02
17	土師器	杯	SA1120 P3柱状穴	残存高 1.4	外面：ナデ、オオネ 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/4	白緑色 1/12	—	—	003-03
18	土師器	杯	SB1160 P1柱状穴	残存高 4.1	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	明黄緑037/6	白緑色 1/12未満	—	—	004-04
19	弥生土器	壺	SB1160 P2柱状穴	残存高 2.6	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/4	白緑色 1/12未満	—	—	003-13
20	弥生土器	壺	SB1160 P2柱状穴	残存高 1.6	外面：ナデ・磨蝕成線文・刷目 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/3	白緑色 1/12未満	—	—	003-14
21	弥生土器	壺	SB1160 P2柱状穴	残存高 1.9	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	赤 良	江崎47.037/4	白緑色 1/12	—	—	003-12
22	須恵器	高杯	SB1160 P4柱状穴	口径 10.2 残存高 3.2	外面：コクロナデ・ヘラ切り 内面：コクロナデ	赤 良	江崎(2.037/1)	白緑色 3/12	—	—	003-15
23	弥生土器	壺	SB1160 P4柱状穴	残存高 6.7	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/3	白緑色 1/12未満	—	—	004-03
24	弥生土器	壺	SB1160 高脚P1柱状穴	残存高 1.9	外面：ハケのちヘラミダキ 内面：ナデ	赤 良	江崎47.036/3	白緑色 1/12	—	—	004-10
25	弥生土器	壺	SB1160 高脚P1柱状穴	残存高 1.9	外面：ハケのちナデ・刷目 内面：ハケのちナデ	赤 良	江崎47.036/4	白緑色 1/12未満	—	—	005-01
26	土製品	土練	SB1160 高脚P1柱状穴	幅長 3.3 幅 1.2 口径 0.4 重さ 3.65g	外面：ナデ	赤 良	灰黄緑035/2	6/12	—	—	001-01
27	須恵器	杯蓋	SB1160 高脚P1柱状穴	残存高 1.4	外面：コクロナデ 内面：コクロナデ	赤 良	江崎6/1	白緑色 1/12未満	—	—	004-09
28	弥生土器	壺	SB1160 高脚P1柱状穴	残存高 5.4	外面：ハケのちヘラミダキ 内面：ナデ	赤 良	江崎47.036/4	—	—	—	004-05
29	土師器	壺	SB1160 高脚P1柱状穴	残存高 1.9	外面：ハケのちナデ 内面：ナデ	赤 良	江崎47.036/4	白緑色 1/12未満	—	—	004-06
30	土師器	杯	SB1160 高脚P1柱状穴	残存高 2.6	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	江崎1.036/6	白緑色 1/12	—	—	004-07
31	弥生土器	壺	SB1160 高脚P1柱状穴	残存高 1.9	外面：ナデ、刷目 内面：ナデ	赤 良	江崎2.037/6	白緑色 1/12未満	—	—	004-08
32	土製品	土練	SB1160 高脚P1柱状穴	幅長 1.8 幅 1.2 口径 0.4 重さ 3.84g	外面：ナデ	赤 良	江崎47.037/3	—	—	—	001-02
33	土師器	壺	SB1161 P1柱状穴	残存高 1.2	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/4	白緑色 1/12未満	—	—	003-05
34	須恵器	杯	SB1161 P1柱状穴	口径 4.3 残存高 2.2	外面：コクロナデ・ヘラ切り 内面：コクロナデ	赤 良	江崎6/1	褐色 3/12	—	—	003-04
35	弥生土器	壺	SB1161 P3柱状穴	残存高 1.1	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	江崎2.036/6	白緑色 1/12	—	—	003-07
36	弥生土器	壺	SB1161 P3柱状穴	残存高 1.2	外面：ナデ、刷目 内面：ナデ	赤 良	江崎086/6	白緑色 1/12	—	—	003-06
37	弥生土器	壺	SB1161 P3柱状穴	想定口径 8.3 残存高 5.0	外面：ハケのちナデ・磨蝕成線文 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/4	褐色 2/12	—	—	003-08
38	弥生土器	壺	SB1161 P3柱状穴	残存高 1.1	外面：ナデ・磨蝕成線文・刷目 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/4	白緑色 1/12未満	—	—	003-09
39	弥生土器	壺	SB1161 P3柱状穴	残存高 1.2	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/4	白緑色 1/12未満	—	—	003-10
40	弥生土器	壺	SB1161 P4柱状穴	想定口径 22.7 残存高 1.4	外面：ナデ・磨蝕成線文 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/3	白緑色 1/12未満	—	—	004-01
41	弥生土器	壺	SB1163 P1柱状穴	残存高 5.6	外面：ナデ、ハケ・刷目 内面：ナデ	赤 良	江崎47.036/4	白緑色 1/12未満	—	—	003-11
42	土師器	瓶	SP1164	残存高 1.4	外面：ハケのちナデ 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/4	白緑色 1/12未満	—	—	005-03
43	土師器	杯	SP1165	残存高 1.7	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	江崎086/6	白緑色 1/12未満	—	—	複製新土 005-04
44	須恵器	壺	SP1166	残存高 1.5	外面：コクロナデ 内面：コクロナデ	赤 良	真珠2.036/1	—	—	内面：磨蝕	005-02
45	縄文土器	深鉢	遺物倉穴輪 (縄文・弥生)	残存高 4.4	外面：ナデ・磨蝕成線文 内面：ナデ	赤 良	江崎47.037/4	白緑色 1/12	—	—	001-06

第Ⅱ-3表 第199次調査 遺物観察表 1

番号	群種	副群	遺構	法長 (cm)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考	登録番号
46	縄文土器	深鉢	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 3.5	外面：ナデ 内面：磨蝕	赤 黒	黒	浅黄2.57/4	白線部 1/12未満		010-01
47	縄文土器	深鉢	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 4.3	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 黒	黒	2.61・黄緑0196/4	白線部 1/12未満		017-01
48	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	鑑定口徑 14.7 残存高 1.8	外面：ナデ・ハケ 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/3	白線部 1/12		006-07
49	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.0	外面：ナデ 内面：ナデ・ヘラミギキ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0196/3	白線部 1/12		016-07
50	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.9	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄2.5937/4	白線部 1/12未満		016-06
51	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.4	外面：ヘラミギキ・黏付突帯 内面：ナデ	赤 黒	黒	027036/6	—		011-03
52	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.9	外面：ナデ・刷目 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	白線部 1/12		010-06
53	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.3	外面：ナデ・刷目 内面：ナデ	赤 黒	黒	027.5387/6	白線部 1/12		010-04
54	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.1	外面：ナデ・刷目 内面：ヘラミギキ	赤 黒	黒	027.5387/6	白線部 1/12未満		012-05
55	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 1.4	外面：ナデ・ヘラミギキ・磨蝕跡線・刷目 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄2.5937/4	白線部 1/12未満		012-01
56	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	鑑定口徑 23.2 残存高 5.0	外面：ナデ・ハケ・磨蝕跡線・刷目・蝕孔 内面：ナデ	赤 黒	黒	027.5386/6	白線部 1/12		007-02
57	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 3.3	外面：ナデ・ハケ・磨蝕跡線・刷目 内面：ナデ・ヘラミギキ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	白線部 1/12未満		010-03
58	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 4.6	外面：ハケのみナデ・刷目・蝕孔 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0195/3	白線部 1/12未満		017-05
59	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	鑑定口徑 13.7 残存高 5.3	外面：ハケ・磨蝕跡線 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	刷目 1/12		018-01
60	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 3.0	外面：ハケのみヘラミギキ 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄2.5936/4	—		016-03
61	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 3.0	外面：ナデ・磨蝕跡線 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0196/3	—		008-05
62	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 3.1	外面：ヘラミギキ・磨蝕跡線・刷付突帯・ 内面：ナデ	赤 黒	黒	027.5387/6	—		011-02
63	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	鑑定口徑 16.0 残存高 4.2	外面：ヘラミギキ・磨蝕跡線 内面：ナデ・ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	—		017-02
64	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 6.9	外面：ナデ・刷付突帯・ 内面：板ナデ	赤 黒	黒	027.5387/6	—	外面：刷付突帯	018-02
65	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 4.4	外面：ハケ・磨蝕跡線・黏付突帯 内面：ヘラミギキ	赤 黒	黒	1.61・黄2.5936/3	—		010-00
66	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 3.1	外面：ヘラミギキ・磨蝕跡線・刷付突帯・ 内面：ナデ	赤 黒	黒	027.5387/6	—		012-02
67	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 4.0	外面：ヘラミギキ・磨蝕跡線・黏付突帯・ 内面：ヘラミギキ	赤 黒	黒	027036/6	—		009-03
68	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.6	外面：ヘラミギキ・磨蝕跡線 内面：ナデ	赤 黒	黒	027036/6	—		011-03
69	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	口徑 7.7 残存高 3.0	外面：ハケのみヘラミギキ 内面：ヘラミギキ	赤 黒	黒	1.61・黄2.5936/4	底面 1/12		008-03
70	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	鑑定口徑 4.8 残存高 4.0	外面：ハケ 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	底面 2/12		011-04
71	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	口徑 18.0 残存高 5.0	外面：ナデ・磨蝕跡線 内面：ナデ・ハケ	赤 黒	黒	027.5386/6	底面 3/12		020-01
72	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 3.3	外面：ナデ・磨蝕跡線 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	—		011-01
73	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 4.1	外面：ナデ・磨蝕跡線 内面：文目	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	—		008-02
74	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 4.1	外面：ハケ・磨蝕跡線 内面：文目	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	—		009-04
75	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	鑑定口徑 13.7 残存高 3.2	外面：ナデ・磨蝕跡線・刷目 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	白線部 2/12		006-01
76	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 1.4	外面：ナデ 内面：ハケのみナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0196/4	白線部 1/12		012-07
77	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.0	外面：ナデ・板状磨蝕の押印による刷目 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/3	白線部 1/12未満		010-07
78	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 3.1	外面：ナデ・磨蝕跡線 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	白線部 1/12		015-04
79	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	鑑定口徑 23.0 残存高 5.0	外面：ヘラミギキ 内面：文目	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/3	刷目 1/12未満		018-05
80	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	鑑定口徑 15.9 残存高 6.2	外面：ナデ・ハケ 内面：ナデ	赤 黒	黒	浅黄緑0198/4	白線部 1/12		006-08
81	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	鑑定口徑 14.9 残存高 5.1	外面：ナデ・ハケ 内面：ナデ	赤 黒	黒	浅黄2.578/3	白線部 1/12		010-05
82	弥生土器	無形器	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.1	外面：ナデ・磨蝕跡線による刷目 内面：ハケ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	白線部 1/12未満		017-07
83	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.4	外面：ナデ・オナデ・磨蝕跡線・刷目 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0195/3	白線部 1/12未満		017-03
84	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 1.1	外面：ナデ・刷目 内面：ナデ	赤 黒	黒	027.5386/6	白線部 1/12未満		012-08
85	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 1.9	外面：ナデ・ハケ・刷目 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0196/3	白線部 1/12未満		008-04
86	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.4	外面：ナデ・磨蝕跡線・刷目 内面：ハケのみナデ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	白線部 1/12		019-04
87	弥生土器	壺	遺物包含層 (縄文・弥生)	残存高 2.9	外面：ナデ・刷目 内面：ナデ	赤 黒	黒	1.61・黄2.5936/4	白線部 1/12未満		017-08
88	土師器	甕	遺物包含層 (古墳・古墳)	鑑定口徑 16.3 残存高 4.1	外面：ナデ・ハケ 内面：ナデ・ハケ	赤 黒	黒	1.61・黄緑0197/4	白線部 1/12		013-08
89	土師器	甕	遺物包含層 (古墳・古墳)	鑑定口徑 17.7 残存高 3.0	外面：ナデ・ハケ 内面：ナデ・ハケ	赤 黒	黒	浅黄2.578/3	白線部 1/12		017-06
90	土師器	甕	遺物包含層 (古墳・古墳)	残存高 4.1	外面：ナデ・ハケ 内面：ナデ・ハケ	赤 黒	黒	027.5387/6	白線部 1/12未満		016-06

第Ⅱ-4表 第199次調査 遺物観察表2



番号	群種	副群	遺構	法長 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	楕円	色調	残存度	備考	登録番号
91	土器類	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 3.1	外底:ナデ 内底:ナデ、ハテ	赤 良	浅黄褐色10YR5/4	口縁部 1/12未満	---	---	101-05
92	土器類	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 3.3	外底:ナデ、ハテ 内底:ナデ、ハテ	赤 良	にじみ黄褐色10YR7/4	口縁部 1/12未満	---	---	101-08
93	土器類	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 7.0	外底:ナデ 内底:ナデ	赤 中/赤 良	にじみ黄褐色10YR7/3	口縁部 1/12	---	---	101-05
94	土器類	杯	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 2.3	外底:ナデ、オサエ 内底:ナデ	赤 良	にじみ黄褐色10YR7/4	口縁部 1/12	---	---	100-02
95	土器類	杯	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 4.7	外底:ナデ、ハテ 内底:ナデ	赤 良	にじみ黄褐色10YR7/4	口縁部 1/12未満	---	---	101-03
96	土器類	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 4.4	外底:ナデ、ハテ 内底:ナデ、オサエ	赤 良	にじみ黄褐色10YR7/4	---	---	---	101-04
97	土器類	土甕	遺物包含層 (古墳→近世)	既定口径 11.8 残存高 4.8	外底:ナデ、ハテ 内底:ナデ、ハテ	赤 良	にじみ黄褐色10YR6/4	口縁部 1/12	---	---	101-01
98	土器類	土甕	遺物包含層 (古墳→近世)	既定口径 12.0 残存高 4.5	外底:ナデ、ハテ 内底:ナデ、ハテ	赤 良	にじみ黄褐色10YR7/4	口縁部 1/12	---	---	100-05
99	土器類	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	既定口径 17.1 残存高 3.1	外底:コクロナデ、縦溝状文 内底:コクロナデ	赤 良	---	口縁部 1/12	---	---	100-00
100	灰土類	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 6.0	外底:コクロナデ、縦溝状文・沈線 内底:コクロナデ	赤 良	灰7.5YR/1	---	内・外底:自然焼付	---	101-02
101	灰土類	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 6.2	外底:コクロナデ、沈線 内底:コクロナデ	赤 良	灰4.0YR/1	---	---	---	100-03
102	灰土類	杯	遺物包含層 (古墳→近世)	既定口径 6.1 残存高 1.5	外底:コクロナデ、へら切り 内底:コクロナデ	赤 良	灰7.5YR/1	沈線	---	---	101-04
103	灰土類	杯	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 2.0	外底:コクロナデ 内底:コクロナデ	赤 良	灰7.5YR/1	口縁部 1/12未満	---	---	101-01
104	灰土類	杯(口縁)	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 1.0	外底:コクロナデ 内底:コクロナデ	赤 良	灰2.0.5Y7/2	口縁部 1/12未満	外底:自然焼付	---	101-05
105	青磁	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 2.8	外底:コクロナデ、縦線 内底:コクロナデ、縦線	赤 良	青:緑青黄5YR5 黄:5Y7/1	---	---	---	102-05
106	青磁	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 1.9	外底:コクロナデ、縦線 内底:コクロナデ、縦線	赤 良	青:黄5Y8 黄:5Y7/1	---	---	---	102-01
107	青磁	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	法径 3.7 残存高 2.0	外底:コクロナデ、縦線 内底:コクロナデ、縦線	赤 良	青:緑青黄5YR5 黄:灰5Y6/1	沈線	---	---	102-06
108	灰緑陶器	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	法径 7.1 残存高 2.3	外底:コクロナデ、足付高台・赤切痕 内底:ナデ、灰線	赤 良	灰2.0.5Y7/2	沈線 3/12	---	---	101-07
109	陶器	山形甕	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 3.9	外底:コクロナデ 内底:コクロナデ	赤 良	黄2.0.5.5Y7/3	口縁部 1/12	内・外底:自然焼付	---	100-10
110	陶器	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	既定口径 12.0 残存高 4.4	外底:コクロナデ、灰線 内底:コクロナデ	赤 良	黄:にじみ黄褐色5YR5 黄:灰2.0.5Y6/2	口縁部 1/12未満	---	---	101-02
111	陶器	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	法径 8.0 残存高 2.0	外底:コクロナデ、足付高台・赤切痕 内底:コクロナデ	赤 良	黄2.0.5.5Y7/3	沈線 8/12	---	---	101-04
112	土器類	灯明鉢	遺物包含層 (古墳→近世)	口径 8.0 残存高 1.9	外底:ヨコナデ、オサエ、ナデ 内底:ヨコナデ、ナデ	赤 良	黄5YR/6	口縁部 1/12	口縁部:濃緑 沈線	---	101-07
113	土器類	灯明鉢	遺物包含層 (古墳→近世)	口径 9.5 残存高 1.3	外底:ナデ、オサエ 内底:ナデ	赤 良	黄5YR/6	口縁部 1/12未満	口縁部:濃緑 沈線	---	101-05
114	土器類	灯明鉢	遺物包含層 (古墳→近世)	既定口径 25.0 残存高 4.8	外底:ナデ、ハテ 内底:ナデ	赤 良	にじみ黄褐色10YR7/3	3/12	外底:焼付	---	100-02
115	土器類	磁甕	遺物包含層 (古墳→近世)	既定口径 46.7 残存高 5.2	外底:ナデ 内底:ナデ	赤 良	黄5YR/6	口縁部 1/12	---	---	100-01
116	土器類	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	残存高 3.9	外底:ナデ 内底:ナデ	赤 良	黄5YR/6	口縁部 1/12未満	---	---	100-04
117	陶器	甕	遺物包含層 (古墳→近世)	既定口径 28.4 残存高 7.2	外底:コクロナデ 内底:コクロナデ	赤 良	にじみ黄褐色10YR6/4	口縁部 1/12	---	---	101-01
118	土製品	土織	遺物包含層 (古墳→近世)	長さ 5.0 幅 0.35 重さ 9.91g	外底:ナデ	赤 良	にじみ黄褐色10YR7/4	完好	---	---	101-05
119	瓦	平瓦	遺物包含層 (古墳→近世)	法長 17.0 幅 13.0 厚さ 1.8	外面:縄目 断面:タタキモチナデ	赤 良	灰5Y5/1	---	---	---	101-01
120	瓦	網瓦	遺物包含層 (古墳→近世)	径 2.4 厚さ 0.1 重さ 2.24g	---	---	---	---	---	---	102-04
121	瓦	網瓦	遺物包含層 (古墳→近世)	径 2.0 厚さ 0.1 重さ 4.02g	---	---	---	---	---	---	102-03
122	赤生土類	甕	赤土	残存高 1.4	外底:ナデ、貝目 内底:ナデ	赤 良	にじみ黄褐色10YR6/4	口縁部 1/12未満	---	---	101-08
123	赤生土類	甕	赤土	法径 7.0 残存高 3.0	外底:ナデ 内底:ナデ、オサエ	赤 良	にじみ黄褐色10YR7/3	沈線 10/12	---	---	101-01
124	赤生土類	甕	赤土	法径 5.7 残存高 4.5	外底:ナデ 内底:縦線	赤 良	にじみ黄褐色10YR7/4	沈線 3/12	---	---	101-03
125	土器類	甕	赤土	残存高 2.9	外底:ナデ 内底:ナデ	赤 良	にじみ黄褐色10YR7/4	口縁部 1/12未満	---	---	101-02
126	灰土類	鉢	赤土	既定口径 6.0 残存高 1.4	外底:コクロナデ、縁部へら切り不調整 内底:コクロナデ	赤 良	灰7.5YR/1	2/12	---	---	101-04
127	灰土類	甕	赤土	法径 9.4 残存高 6.9	外底:コクロナデ、沈線 内底:コクロナデ、コクロナデ	赤 良	にじみ黄褐色10YR6/4	唇部 6/12	---	---	101-03
128	灰緑陶器	甕	赤土	既定口径 7.2 残存高 4.2	外底:コクロナデ、足付高台・赤切痕、縦線 内底:コクロナデ	赤 良	青:黄5YR 黄:灰2.0.5Y6/2	沈線	---	---	101-03
129	灰緑陶器	甕	赤土	既定口径 8.4 残存高 2.3	外底:コクロナデ、足付高台・赤切痕 内底:ナデ、縦線	赤 良	灰2.0.5Y6/2	沈線	---	---	101-06
130	陶器	山形甕	赤土	法径 5.4 残存高 3.7	外底:コクロナデ、足付高台・赤切痕・モミガク線 内底:ナデ	赤 良	灰(2.5)Y7/1	沈線 6/12	---	---	101-01
131	陶器	山形甕	赤土	法径 6.2 残存高 1.4	外底:ナデ、足付高台・赤切痕 内底:ナデ	赤 良	灰黄褐色10YR6/2	沈線 10/12	---	---	101-05
132	陶器	甕	赤土	既定口径 10.0 残存高 3.0	外底:コクロナデ、ナデ 内底:コクロナデ、ナデ	赤 良	灰2.0.5Y6/2	沈線	---	---	101-02
133	土器類	磁甕	赤土	口径 15.0 残存高 8.7	外底:ナデ、オサエ・へらタテ 内底:ナデ	赤 良	黄5YR/6	口縁部 3/12	---	---	101-03
134	石製品	砥石	赤土	残存径 10.1 幅 3.3 厚さ 3.0 重さ 150g	---	---	---	---	---	---	101-04

第II-5表 第199次調査 遺物観察表3

写真図版 1



調査区北半部全景（北から）



調査区南半部全景（南から）



S A6280 (北東から)



S B11360 (北西から)



S B11360 西妻柱筋 (北東から)



S B11360 身舎南側柱筋 (北西から)



S B11360 南廂 (北西から)

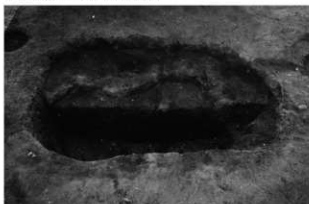
写真図版 3



SA6280 P1 土層 (北西から)



SA6280 P3 土層 (北西から)



SA11120 P3 土層 (北東から)



SB11360 P1 土層 (北から)



SB11360 P2 土層 (北西から)



SB11361 P1・SB11362 P1 土層 (北から)



SB11362 P3・SB11363 P2 土層 (北東から)



SZ11356 南側周溝 土層・土器出土状況 (南東から)

### Ⅲ 重要考古資料（補遺編）

#### 1 はじめに

畜宮跡の出土遺物のうち、学術的価値が特に高い磁器・陶器・土器・土製品、木製品、石製品、金属製品を中心として、平成21年(2009)7月10日付けで国の重要文化財に指定された。種別は考古資料、名称は「三重県畜宮跡出土品」、員数は2,661点(2,658点 附3点(馬歯))である。そのうち磁器・陶器・土器・土製品は2,582点となり、全体の97%を占める。指定品は土師器、須恵器、灰軸陶器、緑軸陶器、輸入陶磁などの土器・陶磁器類、土馬・小型模造品・畜串などの祭祀遺物、多様な硬などの官衙の内容を示す遺物、石製袴帯・金銅製馬具・銅鏡などで構成される。

指定品の大部分が土器・陶磁器類となるが、言い換えれば畜宮跡の実態を知るうえで欠かせない資料ということでもある。特に土師器が出土土器の大半を占めるほどの膨大な出土量に特徴がある。また、500点を超える緑軸陶器は特筆され、平城宮跡を除いてほぼ類例のない形象碑、平安時代のひらがな墨書土器など、都と変わらない暮らしぶりを窺わせる資料が含まれている。さらに、官司名と考えられる墨書土器、和同開珎が納められていた地鎮具などもあり、文献史料だけでは知り得ない畜宮の実態把握できる資料となる。

このように、唯一無二の遺跡である畜宮跡の考古資料は、官都に準ずる内容を示しているとともに、7世紀末から12世紀末に至る土器の変遷を通過できる東海地方の基準資料として、特に高い学術的価値が指定理由となっている。

これらの指定品は、発掘調査が開始した昭和45年度(1970)から平成17年度(2005)、第1次調査から第148次調査までの出土品を対象としている。ただし、鎌倉時代以降の畜宮跡の実態が判然としないため、指定対象から除外された経緯がある。

重要文化財指定から10年以上の歳月を経た。今後は平成18年度以降の出土品を対象として、学術的価値の高い資料の追加指定を目指していく方針である。平成28年度(2016)以降は、学術発掘調査の重点課題として、飛鳥・奈良時代の畜宮跡の実態解明を掲げているが、今日的には飛鳥時代の畜宮中核域の解明が進んでいるので、いずれこうした初現期の畜宮跡を示す資料の追加指定も課題となってくる。

さて、当該年度に実施した発掘調査の成果は、原則次年度に畜宮歴史博物館は『発掘調査概報』、明和町は『現状変更緊急発掘調査報告』として刊行<sup>1)</sup>を続けてすでに40年に及ぶが、網羅的な情報の収録は叶わず、資料掲載の遺漏が生じている場合がある。そこで過去の調査の出土遺物を再整理して優品を抽出したのが、本章で報告する資料となる。正報告書の刊行を随時行っている現状ではあるが、速報的に本概報での報告に代えたい。

#### 2 資料

今回、抽出した資料は、重要文化財の追加指定候補である。本質的価値のうち、官都との共通性をもち、それに準ずる内容をもつ資料の補完を目的としており、その価値を高める意図がある。その前提として、未報告遺物の資料化を行うものである。以下からは種別・器種ごとに調査次数の順に報告する。

##### (1) 土師器ⅤE・須恵器ⅤE (第三-1 図 1~11)

第152次調査のSK9785・SK9786出土で、方格街区の柳原区画に位置する。二つの土坑からは土器類や金属製品関連遺物、炭化材などが大量に出土しており、土師器は完形品あるいは完形に復元できる個体が多い。暗文土師器・刻書土器・黒色土器のほか、鍔造洋の出土が特筆され、畜宮Ⅱ-1~2期の良好な資料群である。

底部が欠損する個体は多いが、法量にみる二つのまとまり(口径6~7cmと8~9cm)が認められる。器面の調整に違いがあり、外面は1~5・10はケズリ、6はナデ、8はハガキ、9はハケとなり、内面はハケを施す8以外、ナデによって調整している。

##### (2) 緑軸陶器 (第三-1 図 12~30)

表土や包含層などの遺構外での掘削時に出土したものが大半であるが、30の碗片のみが第181次調査のSK10697からの遺構出土となる。資料化したものは碗が主体となるが、14は耳皿で、22・23はその可能性があり、21・29は瓶あるいは台付壺と推測されるものである。25・26は陰刻花文が施された碗と香炉蓋であるが、小片のため図像は判然としない。SK10697出土の30は畜宮Ⅲ-2~3期と推定されるが、これ以外の時期決定は困難な状況である。軸葉の色調にみる産地推定によると、猿投産・京都産・近江

産・美濃産が含まれると想定される。

(3) 墨書土器 (第三-1図 31~54)

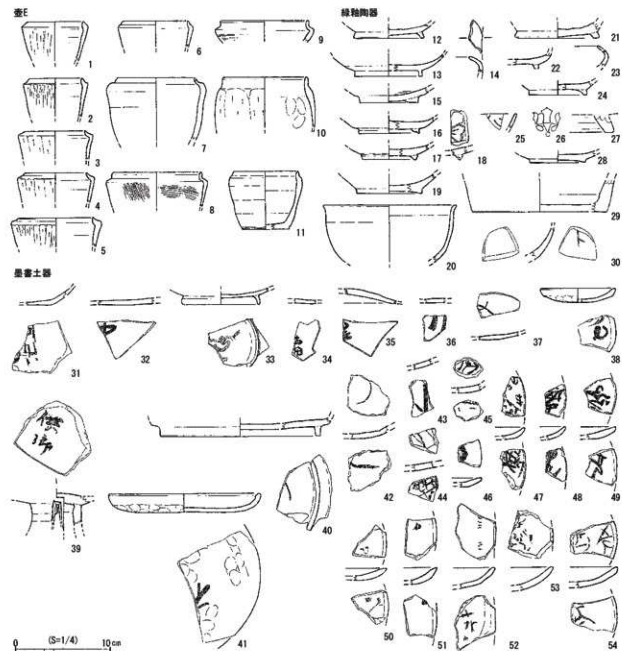
土師器・須恵器・灰釉陶器の主に皿に墨書が施されている。32は「中」か、34は「古田」、39は高杯の杯部に「供御」と書かれている<sup>2)</sup>。ひらがな墨書と思しきものも存在するが、総じて判読は不可能である。ようするに多くが習書や筆馴らしと推測されるし、記号・文様の類いを呈している場合もある。なお、36の筆致はほかの流麗なものとは比べて明らかに強く荒い。

(4) 刻書土器 (第三-2図 55~69)

土師器・須恵器・灰釉陶器・黒色土器の主として杯に刻書を施す。刻書は「×」や「井」状、あるいは鳥足状の線刻が多く、杯などの底に施されるものが大半である。一方で57は口縁部内面に鳥足状の線刻、65は高杯の脚部外面に「井」状の線刻が施されている。59はこのなかで唯一、焼成後の刻書である。62は灰釉陶器蓋で輪花が描かれている。

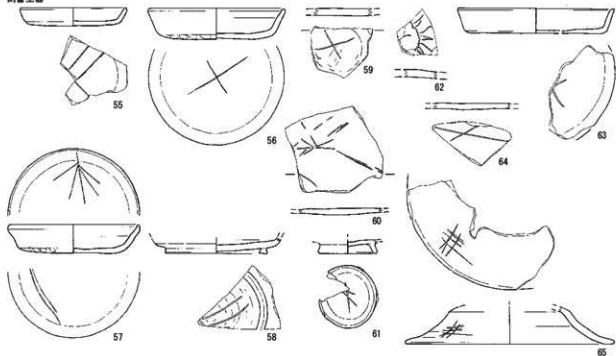
(5) 陶硯 (第三-2図 70・71)

どちらも円面硯の硯面縁部外周の破片とみられ、

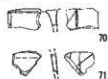


第三-1図 重要考古資料 遺物実測図1 (1:4)

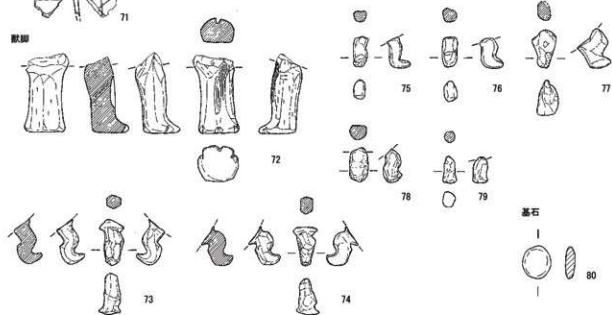
割書土器



陶硯



獸脚



0 (S=1/4) 20 cm

基石  
0 (S=1/2) 5 cm

第三-2図 重要考古資料 遺物実測図2 (1:4 80は1:2)

線刻による文様が施されている。器壁の薄さから碗面径が15cmに収まるやや小型サイズの円面碗と推測される。

#### (6) 獸脚 (第三-2図 72~79)

いずれも土師質の獸脚である。72は端部を切り込みによる踏を表現し、脛前面に縦のスリットを施している。脚底全面を接地面として踏ん張る形態である。蹄脚視の獸脚に通じるものであり、やや大型の土師器の脚部として使用されていた可能性が想定される。73~79は端部を前面に折り曲げて鉤状に作出しており、小さい接地面で支える形態となる。三足鍋などの小型の脚部がついた土器の支持材と考えられる。

#### (7) 石製品(碁石) (第三-2図 80)

断面形は扁平なレンズ状で平面形は円形を呈する円礫であり、全面が黒色を示すことから碁石と推定したものである。石材石質は黒色頁岩か。

### 3 まとめ

半世紀にわたる発掘調査は、令和3年度で200次(約740回の調査地点、調査面積は約23万㎡)を超え、斎宮跡にかかる重要な調査成果の蓄積をもたらしている。近年は、正報告書の刊行を目的とした既往調査と出土品の再検証とともに、重要文化財の追加指定を視野に入れた再点検を行っている。今回の報告は、これまでの資料化の遺漏分であり、いずれも重要考古資料として学術的価値は高いものである。本報告が斎宮跡の調査研究に資する機会とともに、追加指定候補として位置付けておきたい。

なお、未報告の重要考古資料の金属製品は、今回収録できなかったので、次年度以降の発掘調査概報にて報告することとしたい。

#### 註

- 1) 平成元年度(1989)以前は、三重県教育委員会による『古里遺跡発掘調査報告』・『斎王宮跡発掘調査報告』・『斎宮跡発掘調査概報』など、三重県斎宮跡調査事務所による『斎宮跡調査事務所年報』が含まれる。
- 2) 大川勝宏 2021 「『供御』墨書土器の発見」『斎宮歴史博物館だより』No. 87 斎宮歴史博物館



＜書E＞

番号	調査地	調査次数	地区遺構	法基 (cm)	調整・技法の特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	土庫部	倉形	152	SK9786	口径 6.2 内径 4.2 残存高 5.0	内面：ナデ・ケズリ	新 瓦	焼538/6	口縁部 6/12		307-05
2	土庫部	倉形	152	SK9786	口径 5.8 内径 4.1 残存高 4.1	内面：ナデ・ケズリ	新 瓦	明赤焼538/6	口縁部 1/12		307-09
3	土庫部	倉形	152	SK9786	口径 6.3 内径 4.2 残存高 2.1	内面：ナデ・ケズリ	新 瓦	焼538/6	口縁部 3/12		307-07
4	土庫部	倉形	152	SK9786	口径 6.5 内径 3.1 残存高 3.1	内面：ナデ・ケズリ	新 瓦	焼538/6	口縁部 7/12		308-02
5	土庫部	倉形	152	SK9786	口径 7.8 内径 4.2 残存高 2.1	内面：ナデ・ケズリ	新 瓦	明赤焼538/6	口縁部 2/12		307-06
6	土庫部	倉形	152	SK9786	口径 6.8 内径 2.8 残存高 2.8	内面：ナデ	新 瓦	焼7,338/6	口縁部 1/12		307-08
7	土庫部	倉形	152	SK9786	口径 6.2 内径 2.8 残存高 2.8	内面：敷粉	新 瓦	浅黄焼7,338/6	口縁部 4/12		308-04
8	土庫部	倉形	152	SK9786	口径 9.2 内径 3.7 残存高 3.7	内面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ・ハケ	新 瓦	焼7,338/6	口縁部 6/12		308-03
9	土庫部	倉形	152	SK9785	口径 9.2 内径 2.3 残存高 2.3	内面：ナデ・ハケ 内面：ナデ	新 瓦	焼538/6	口縁部 2/12		307-03
10	土庫部	倉形	152	SK9785	口径 8.7 内径 3.4 残存高 3.4	内面：ナデ・ケズリ 内面：ナデ	新 瓦	焼538/6	口縁部 1/12		307-04
11	須倉部	倉形	152	SK9785	口径 7.0 内径 6.1 残存高 6.1	内面：ナデ・黄粉 内面：ナデ	新 瓦	灰DC537/2	全体約4/12		308-01

＜緑釉陶器＞

12	緑釉陶器	甗	152	6A510 a15 黄土	口径 7.4 残存高 1.7	外面：ロコケズリ・貼付高台・ 中央凹	新 瓦	緑538/6	口縁部 6/12	トナシあり	301-01
13	緑釉陶器	甗	153	6A311 5.0 灰土層	口径 7.0 残存高 2.4	外面：敷粉・貼付高台・中央凹 内面：黄粉	新 瓦	緑538/6	口縁部 3/12	トナシあり	301-03
14	緑釉陶器	耳皿	153	6A311 1.6 包	残存高 1.7	外面：敷粉	新 瓦	緑538/6	口縁部 1/12		301-02
15	緑釉陶器	甗	158	6A619 6922 包	口径 6.7 残存高 1.6	外面：貼付高台	新 瓦	緑538/6	口縁部 2/12		301-04
16	緑釉陶器	甗	158	6A619 923 包	口径 6.4 残存高 1.7	外面：敷粉・ロコケズリ・貼付高台 内面：敷粉・ロコケズリ	新 瓦	緑538/6	口縁部 5/12		301-05
17	緑釉陶器	甗	159	6A611 藤土	口径 5.6 残存高 1.6	外面：敷粉・貼付高台	新 瓦	緑538/6	口縁部 5/12		301-06
18	緑釉陶器	甗	159	6A611 藤土	口径 5.8 残存高 1.4	内面：貼付高台	新 瓦	緑538/6	口縁部 1/12		301-07
19	緑釉陶器	甗	160	6A619 e 21 包	口径 7.0 残存高 2.1	外面：敷粉・ロコケズリ 内面：敷粉	新 瓦	緑538/6	口縁部 2/12		301-08
20	緑釉陶器	甗	160	6A619 e22 包	口径 6.1 残存高 6.1	外面：敷粉 内面：敷粉	新 瓦	緑538/6	口縁部 2/12		301-09
21	緑釉陶器	付付意か 瓶	160	6A619 e21 包	口径 9.0 残存高 1.9	外面：敷粉・貼付高台 内面：ロコケズリ	新 瓦	緑538/6	口縁部 2/12		301-10
22	緑釉陶器	耳皿	167	6A619 p 21 F.1	口径 5.8 残存高 1.5	外面：敷粉・貼付高台	新 瓦	緑538/6	口縁部 1/12		302-01
23	緑釉陶器	耳皿	167	6A619 q 20 F.2	口径 5.8 残存高 1.6	外面：敷粉 内面：敷粉	新 瓦	緑538/6	口縁部 1/12		302-02
24	緑釉陶器	甗	171	6A611 a 19 (黄赤) 包	口径 6.2 残存高 1.4	外面：ロコケズリ・貼付高台・中央凹 内面：ロコケズリ	新 瓦	緑538/6	口縁部 5/12		302-04
25	緑釉陶器	貼付花文 甗	171	6A611 f 19 包	口径 2.0	外面：敷粉	新 瓦	緑538/6	口縁部 1/12		302-03
26	緑釉陶器	貼付花文 香炉	171	6A611 519 (黄赤) 包	—	外面：敷粉	新 瓦	緑538/6	口縁部 1/12		302-06
27	緑釉陶器	甗	173	6A619 a 15 F.1	口径 5.8 残存高 1.8	外面：敷粉・ケズリ	新 瓦	緑538/6	口縁部 1/12		302-05
28	緑釉陶器	甗	177	6A619 C20 カケラ	口径 6.0 残存高 1.1	外面：敷粉・ケズリ 内面：敷粉	新 瓦	緑538/6	口縁部 3/12		302-08
29	緑釉陶器	瓶?	177	6A619 カケラ	口径 14.2 残存高 3.3	—	新 瓦	緑538/6	口縁部 1/12		302-07
30	緑釉陶器	甗	181	SK19877	口径 6.0 残存高 3.5	外面：緑肌あり 内面：敷粉	新 瓦	緑538/6	口縁部 1/12		302-09

＜墨書土器＞

31	土庫部	新小瓶	152	6A619 C20 包 (黄赤)	口径 5.8 残存高 1.8	外面：ナデ 内面：ナデ	新 瓦	焼538/6	口縁部 6/12		309-02	
32	土庫部	新小瓶	157	6A619 a9 藤土	—	外面：ナデ 内面：ナデ	新 瓦	焼538/6	—		309-03	
33	灰倉部	甗	167	SK10230	口径 4.0 残存高 3.7	外面：ロコケズリ・貼付高台・中央凹 内面：ナデ・ナデ	新 瓦	灰DC 537/1	口縁部 3/12		309-04	
34	土庫部	新小瓶	167	SK10229	—	外面：ナデ 内面：ナデ	新 瓦	焼538/6	—		309-05	
35	灰倉部	甗 (黄土)	168	SK10248	口径 4.6 残存高 1.6	外面：ナデ・ロコケズリ 内面：ロコケズリ	新 瓦	灰DC2,538/1	—		309-01	
36	土庫部	新小瓶	168	SK10248	—	外面：ナデ 内面：ナデ・オサキ	新 瓦	焼538/6	—	3.1 僅くあり	309-02	
37	土庫部	小瓶?	175	SK10118	—	外面：ナデ 内面：ナデ	新 瓦	浅黄7,338/3	—	ひらがな状	309-03	
38	土庫部	小瓶	175	SK10118	口径 7.6 残存高 1.5	外面：ナデ 内面：ナデ	新 瓦	灰DC2,538/2	口縁部 2/12		309-04	
39	灰倉部	甗	176	6A619 F23 包	口径 5.2 残存高 3.8	外面：ロコケズリ 内面：ナデ (灰用)	新 今 敏	灰DC2,538/2	口縁部 2/12	断面のみ残存	墨書 係録小 2 字宛に古 形あり	309-01
40	灰倉部	付付瓶	180	6A619 E3 包	口径 17.0 残存高 1.8	外面：ロコケズリ・貼付高台 内面：ロコケズリ	新 瓦	灰DC2,538/2	—		309-05	
41	土庫部	甗	183	SK19757	口径 15.8 残存高 2.0	外面：ナデ・オサキ・ナデ 内面：ナデ	新 瓦	焼538/6	全体約4/12		311-01	
42	土庫部	甗小瓶	163	6A611 f 19 包 (黄赤)	—	外面：ナデ 内面：ナデ	新 瓦	1.5 黄赤焼538/7.4	—		311-01	
43	土庫部	小瓶	163	6A611 f 19 包 (黄赤)	—	外面：ナデ 内面：ナデ	新 瓦	浅黄2,538/4	—		311-01	

第三-1表 重要考古資料 遺物観察表1

番号	器種	器形	調査次数	地区 遺跡	出土量 (cm)	調査・住法の特徴	粘土 構成	色調	残存度	備考	登録 番号
44	土器類	黒古杯	163	64R19 k18 瓦片層	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	にぶい・黄橙・B97/3	—		013-02
45	土器類	黒古杯	163	64R11 k19 瓦	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	成黄橙・B98/3	—		013-01
46	土器類	小皿	163	64R11 k19 瓦(東西)	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	成黄橙・B98/4	—		012-03
47	土器類	小皿	163	64R10 k20 瓦片層	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	成黄橙・B98/2	—		012-05
48	土器類	小皿	163	64R11 k19 瓦(東西)	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	成黄橙・B98/2	—		012-04
49	土器類	小皿	163	64R11 k19 瓦(東西)	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	にぶい・黄橙・B97/4	—		012-01
50	土器類	皿	163	64R11 k20 瓦	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	成黄橙・B97/2	—		012-07
51	土器類	皿	163	64R11 k20 瓦(東西)	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	にぶい・黄橙・B97/4	—		013-04
52	土器類	皿	163	64R11 k19 瓦(東西)	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	にぶい・黄橙・B97/4	—		012-06
53	土器類	皿	163	64R11 k20 瓦片層	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	にぶい・黄橙・B98/3	—		014-02
54	土器類	皿	163	3D16118	—	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	成黄橙・B98/2	—		013-03

### ◀ 剣先土器 ▶

55	土器類	皿	152	SK9785	底径 残存高	9.4 1.9	外面：ナデ・オサシ 内面：ナデ	赤 良	成黄8/6	口縁部1/12		003-02
56	土器類	皿A	153	64S11 g12 P1 2.5x3.5	口径 残存高	7.2 3.3	外面：ロコナデ・ナデ・オサシ 内面：ロコナデ・ナデ	赤 良	成黄8/6	全体の16/12		004-01
57	土器類	皿	152	SK9676	口径 残存高	13.6 3.0	外面：ロコナデ・オサシ 内面：ロコナデ・ナデ	赤 良	成黄8/6	完整		003-03
58	煎茶器	杯	152	SK9786	底径 残存高	10.8 1.7	外面：ロコナデ・刷毛へちま切り・ 内面：ナデ(使用痕あり)	赤 良	成(G7.5)/7	底面 2/12		003-01
59	煎茶器	杯小皿	152	SK9669	残存高	6.8	外面：刷毛へちま切りのろナデ (使用痕あり)	赤 良	成(G7.5)/6	—	焼成痕調査	003-05
60	土器類	皿	152	SK9792	残存高	1.0	外面：ナデ・オサシ 内面：ナデ	赤 良	成(G7.5)/7.6	—		003-04
61	黒色土器	台付皿	153	64S11 30 皿	底径 残存高	5.8 1.5	外面：ナデ・刷毛面付 内面：野原	赤 良	にぶい・黄7.5/B97/4	底面 10/12		003-06
62	灰釉陶器	蓋	160	64R1 N3 赤土	—	—	—	赤 良	成(G7.5)/7	—	006-05	
63	土器類	杯	167	64R10 r15 刷毛面	口径 残存高	16.4 2.6	外面：ハケのろナデ 内面：メハケのろナデ	赤 良	にぶい・黄7.5/B97/4	全体の12/12		004-02
64	土器類	杯小皿	167	64R10 g15 刷毛面	—	—	—	赤 良	成黄焼7.5/B98/3	—	006-01	
65	土器類	高杯	182-10	SK10754	唇口径 残存高	11.1 3.8	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	成7.5/B97.6	唇口部3/12		008-03
66	土器類	杯小皿	182-12	60P11(伴器)内溝 B98/1 (SK3・4・5 土層一括)	—	—	外面：ナデ・オサシ 内面：ナデ	赤 良	成9/B7.6	—		006-03
67	土器類	皿A	182-12	SK10758	口径 底径	12.8 3.1	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	明赤成B95/8	全体の7/12	内外面磁付	005-01
68	土器類	皿A	182-12	SK10757	口径 底径	14.2 3.0	外面：ナデ・オサシ 内面：ナデ	赤 良	成9/B96.6	全体の12/12	外面に磁付	006-02
69	土器類	皿A	182-12	60P11(伴器)内溝 B98/1	口径 底径	16.8 2.5	外面：ナデ 内面：ナデ	赤 良	明赤成2.5/B95.8	全体の6/12		006-04

### ◀ 陶磁 ▶

70	陶磁	片面磁	152	SK9785	残存高	2.3	外面：ロコナデ 内面：ロコナデ	赤 良	成黄2.5/7.2	—		007-01
71	陶磁	片面磁	153	SK9835	残存高	2.3	外面：ミダキ 内面：ナデ	赤 良	成黄18.5/3 内面：成(G7.5)/7	—		007-02

### ◀ 獣硯 ▶

72	土器類	煎茶器	34	E3_4 土層2	残存高	8.5	外面：ハケのろナデ	赤 良	成7.5/B97.6	—		015-01
73	土器類	煎茶器	103	S07031	残存高	8.6	外面：ナデ	赤 良	成黄焼7.5/B98.6	—		016-02
74	土器類	煎茶器	103	E-9 瓦片層	残存高	4.1	外面：ナデ	赤 良	にぶい・黄7.5/B97/4	—		016-01
75	土器類	煎茶器	109	F17 P1	残存高	3.2	外面：ナデ	赤 良	成(G2.5)/8.2	—		016-03
76	土器類	煎茶器	109	F18 P2	残存高	3.2	外面：ナデ	赤 良	成黄2.5/8/3	—		016-04
77	土器類	煎茶器	114	K20 土層14	残存高	4.1	外面：ナデ	赤 良	成(G10)/8/2	—		016-05
78	土器類	煎茶器	173	G-8 北西土坑中 上面	残存高	3.6	外面：ナデ	赤 良	にぶい・黄7.5/B97/4	—		015-02
79	土器類	煎茶器	173	G-8 北西土坑集 中	残存高	2.7	外面：ナデ	赤 良	成黄焼7.5/B98/4	—		015-03

### ◀ 墓石 ▶

80	原石	墓石	159	南 土層1	重量(t)	1.62	—	—	赤 良	成7.5/32/1	ほぼ完整	016-06
----	----	----	-----	----------	-------	------	---	---	-----	-----------	------	--------

第三-2表 重要考古資料 遺物観察表 2

## 報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと せいしゆにねんどほくつちりょうさがいほう							
書名	史跡斎宮跡 令和2年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	川部浩司							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-3800							
発行年月日	西暦 2022年2月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さいくうあと 斎宮跡	たきごんけいおらより 多気郡明和町 さいくう ちのけがわ 斎宮・竹川	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	20200907 ～ 20210129	270.4㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	特記事項
斎宮跡 第199次	官衙	弥生・飛鳥・ 鎌倉		掘立柱建物・ 方形周溝墓・ 溝・土坑		縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・陶硯・ 青磁・陶器・瓦・土製品・ 石製品・鉄製品・銭貨		飛鳥時代の 斎宮中核域 (斜方位区画 の北西部)
要約	<p>飛鳥時代の斎宮中核域での発掘調査において、斜方位区画の北西角を構成する掘立柱塼、正殿と推定される東西棟の廂付建物、西脇殿とみられる南北棟の掘立柱建物を確認した。斜方位区画の構造と規模、区画内部の建物構成と変遷を推定できるようになり、特に正殿と推定される中心建物や外周建物の西第1堂を確認できたことが重要な成果である。</p>							

---

史跡 齋宮跡

令和2年度

發掘調査概報

2022年2月22日

編集・発行 齋宮歴史博物館

印刷 共立印刷株式会社

---





